つきの国

sumita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つきの国

【Ｎコード】
Ｎ７６９８Ｐ

【作者名】
ｓｕｍｉｔａ

【あらすじ】
　元携帯小説なので、ＰＣでは読みづらいかもしれません。
異世界で甘い恋愛しちゃいましょ。
／召喚された先で出会ったのは、腹黒束縛魔族と悲しい物語だった。

プロローグ

俺の生まれた夜、夜空は紅く輝いた。

緋い月に魅入られたか、母は俺を産んで間も無く死んだらしい。

父の亡くなった夜にも、やはり緋い月は嗤っていた。

俺を。

燃えるような、熱い血のような輝きは、

この世の何よりも、冷たく、残酷だ。

…………

暗闇は、怖くない。

刃物も、怖くない。

・・・何も、怖くない。

そう自分に言い聞かせて、もう何年経ったろう。

大丈夫、だいじょうぶ。

もう、何度・・・そうやって夜を過ごしただろう。

その度に、思っていた。

この世界から、救ってくれる人がいるなら。

私は殺されたって、いいんだ。

はじまり（前書き）

他サイトに置いていたお話を移動しました。元が携帯向けですので、多少読みづらいかと思います。ご勘弁下さい。
文は繋ぎ部分以外、一切手を加えておりませんので、以前からお読み頂いてる方はご安心下さい。

はじまり

ピピッピピッピピッピピピッ・・・

「ん・・・・あさ・・・・」

目覚まし時計のアラームを止めて、目尻が少し濡れているのに気付く。

覚えてないけど、また変な夢でも見たのかな。

きっと、目覚ましに助けられたんだ。

＊＊＊＊＊＊

「あら、奏流（かなる）。随分早いのね」

槍が降るわ、と微笑んでコーヒーカップを口元に運ぶ。

そんな仕草が似合ってしまう女性。

「おはよ、ママ。もうすぐ学祭だから、朝から劇の練習なんだって」

「嫌みたいな言い方ね？」

「やだ。・・・主役、なの」

「いいことじゃない」

のん気に言わないでよ、と頬を膨らませてみる。

主役なんて冗談じゃない。
おまけに役柄が、とってもおかしい。

声楽家で、普段多忙極まりない母は、こんなときだけ母親ぶってどんな脚本？　なんて聞いてくる。
できれば、誰にも話したくないけれど。
本番を見に来ないように説得するためには、仕方ない。

「ドラキュラ伯爵」

「あら・・・」

高校の劇で、それは無いだろうと、自分でも思う。
案の定、母も同じ意見らしい。

「噛み付くところも、やるの？」

「むしろ、噛み付かれる役」

最初は、こう言われたのだ。

『かなるっ！　あんたは寝てるだけでいいから、それだけだから、お願いよ！　この劇には絶対出てね！』

脚本家であり、クラス随一の乙女思考を持つ親友に言われれば、・・・断ることなんて出来ない。
それがまさか、ドラキュラ伯爵の餌役とは。

「それが主役なの？　ドラキュラ君が主役じゃないの？」

「ラブストーリーなんだって」

噛み付かれるところも、フリらしいけど。
フリじゃなかったら許さないんだから！

「・・・という訳で、しばらく帰る時間遅くなります」

「ええ。でもママ、今夜からイタリアなの。パパもアメリカにしばらく居るって言ってたから」

「お土産たくさんね」

多分、今夜からまた、しばらく一人の生活。
大丈夫。

「奏流さん」

学校に着いてすぐ、下駄箱付近で呼び止められた。
爽やかな笑顔で近づいてくるのは、ドラキュラ君だった。

「おはよう・・・えっと、」

「杉浦。早いんだね」

「そうかな」

劇の練習さえなければ、遅刻ぎりぎりで来るのだ。
朝は、苦手だから。
さっさと教室に行こうと、背を向けると、杉浦君の声が掛かる。

「一緒に行こう？　俺、奏流さんともっと話したいんだ」

こういう人は、苦手かもしれない。
でも、コミュニケーションは大事だし。
私はにっこりと笑って見せた。

「奏流さんの髪、もともとの色？」

「うん。よく間違われるんだけど、クォーターなんだ」

「だからかー」

本当に、この髪と目には、昔から苦労した。
背中の真ん中までやっと伸ばした髪は、淡い栗色。
たまに覗き込まれてうんざりする瞳は、黒に近い青。
ハーフである父に近い色素だ。

教室の手前まで、他愛の無い会話をして。
杉浦君はまるで内緒話でもするように、少しかがんで囁いた。

「おれ、嬉しかったんだ」

何が？

「奏流さんが、クリスティ役だったこと」

「え・・・？」

クリスティは、私が演じる役だ。
伯爵の・・・恋の相手。

「劇、がんばろ」

そう言って、朝の空気みたいな爽やかさで微笑んだ杉浦君は、すぐに教室の中に消えてしまった。

「疲れた・・・」

人気の少なくなった教室で、私がどっと机に突っ伏すと、真上から呆れたような溜息がした。

「かなる、大丈夫～？」

「和葉（かずは）・・・」

出たな、乙女監督。

「誰の責任？」

「免疫の無いあんたのためを思って動いた、あたしの責任ね」

さあ責めてみれば？

と言わんばかりの余裕の表情の和葉。

「免疫・・・」

「あと、杉浦君のためかな？」

杉浦君、か・・・。
今日はやけに張り切ってたな、あの人。
目を合わせたら真っ赤になるし。
「やだっ！　かなる、気付いてなかったの？」
「なにを？」
今日の練習は最悪だった。
二人きりのシーンになると、みんな変な笑顔になるのだ。
「ま、いいわ。学祭の最終日が勝負らしいし」
何の勝負？
と聞く元気も無い。体力も無い。
「私、帰るね」
「送る？」
和葉はちょっとしたお嬢様で、毎日送迎車で学校に来ているのだ。
「ううん、帰り道本屋さんに寄りたいから」
そんな気はないのだけど、送ってもらうのは心苦しいから少し嘘をつく。
「ＯＫ、気をつけてね？」
「明日はもう少し、簡単な演技にしてよね」

「それは保留～」

ばいばい、と手を振って、和葉をもう一度見た。

それが、和葉を見た、最後。

学校を出て、しばらくしないうちに強めの風が出てきた。
時折セーラー服のスカートを押さえつつ、帰り道を急ぐ。

（やっぱり、送ってもらえばよかった？）

こんなに外が暗いとは思わなかった。
早く、帰りたい。
いつもそう思いながら帰るけど、今日は少し違った。
どうしてか、胸がドキドキして、汗まで流れてきている。

それに、・・・月が緋い気がする。
目に映る月はちゃんと黄色い。
けれど、目をそらせば降り注ぐ光が緋いのだ。

今、何時だろう。
学校を出て、かなりの時間が経った気がするのに。
まだ、家に着かない。

見覚えのある公園に差しかかった所で、携帯を取り出した。
時間を見るために。

けど画面を見て、背筋が凍った。

「なに・・・？　これ」

表示された時刻は　２３：００　。
６時には、確かに学校を出てた・・・。

（やだ、気味悪い、）

きっと、壊れちゃったんだ。
そう思っても、背筋に流れる嫌な汗は、止まらなかった。
いつもはそんなに携帯を頼りにしていないのに、こんなとき壊れたということが、とても心細い。

一度ぎゅっと目を閉じて、開けて、前を見た。
道の先が、見えない。

街灯、暗すぎるよ。
まるで、違う世界に閉じ込められてしまったみたいだ・・・

（・・・どうしよう、歩く？　でも・・・）

酷く、体が重たい。
もしも携帯が正しかったなら、５時間も歩いていたことになる。
進むことも、戻ることも出来ないでいると、突然強い風が吹いた。

「・・・っぅ！」

携帯を握っていた右手に痛みが走り、思わず目を閉じてしまった。
カシャン、と遠くで寂しい音がする。
今の風が、携帯を公園の中に飛ばしてしまったらしい。

右手からはわずかに血が流れていた。

「っもう！」

ポケットからハンカチを取り出して、流れる血を抑える為に、きつめに縛る。

とりあえず、取りに行こう。

夜の公園は、こんな時だからか、何かが潜んでいるように思えた。

携帯は中の空間が大きく作られている遊具の中に落ちていた。

バッグを置いて、中に潜る。

携帯はすぐに手の中に帰ってきた。

「よかった」

壊れてない。

小さな傷一つ、ついていなかった。

少しほっとして、顔を上げると、奥の方で何かが光っているのを見つけた。

キラキラと、夜空の星のような、目を離すことの出来ない光。

なぜか、その光に目を奪われた。

いや、心を。

「・・・・・・」

静かに近寄り、手を伸ばす。

ここで帰ればいいのに。

一瞬の思いは、すぐに消えてしまう。

外の風は強くなるばかり。
公園の中だからか、森のにおいがした。
キラキラと光る何かが、やっと、指先に触れる。
黒い、真珠。

「あ・・・・」

まずい、と思ったときには、手遅れだった。
今まで感じたことの無い強い、見えない力で体を持っていかれる。
この不思議な夜に起こったことで、もっともおかしなこと・・・・
それは、その抗えないほどの力に、私が全く抵抗しなかったと言うことだ。

＊＊＊＊＊＊

「なんだ・・・？」

俺は閉じていた目を開き、木々に隠されても輝きを失わない月を見上げた。
仮眠を取っていたのだが、明らかな異変が近くで起きているのに気付いたのだ。

また、緋い。

「今度はどちらを殺す？　俺か？」

それとも、あいつか。

俺は右手で前髪をかき上げ、月に笑って見せた。

そして手早く長めの黒髪をまとめると、異変のほうへと向った。

わずかな血の匂いを、感じながら。

森

強い力で引かれた後、胃の中がひっくり返るような感覚に襲われ、
目を強く閉じる。
息が、出来ない。

（しぬ、の・・・？）

それでもいい、かな・・・。
そう覚悟を決めた瞬間、どさりと地面に落ちた。

「痛い・・・・」

死ぬのはいいけど、痛いのは嫌だ。
でもやっと呼吸をすることが出来た。
ふっと目を開けると、見たことも無い光景があった。
自分の眉間にしわが寄ったのがわかる。

森だ。

公園で感じたにおいとまったく同じものが、ここにも満ちている。

（よかった、ここ、公園の中かな・・・）

今さっき自分に起きたことなど、全て忘れてしまった。
安心して。

「あー、バッグ、どこかな・・・」

立ち上がり、辺りを見回す。
ふと、夜のはずなのに、足元に複数の影がさした。
地面においていた視線を上げる。

「・・・ここにいたか」

文字通り、血の気が引くような、男の声。
その声の主は、闇色の服で全身を包んでいた。
判別できるのは顔だけ。
男に従うように立っている人たちは目以外の顔も、すっぽりと闇色で覆ってしまっている。

「王都に呼んだのに・・・何故こんなところに・・・」

「・・・・・あの・・・・?」

なんなんだろう。この人たち。

怪しすぎる。
近づいてきたとき、足音なんてしなかったよ?

「まあ、いい。　主が首を長くしてお待ちなのだ」

さあ、と出された手。

本能が、告げる。

――取っちゃ、ダメ。

この手を取ったら、私はもう戻れない。

「？　どうした？」

「いや、」

男は私の拒絶に、ニヤリと笑った。
男の金色の髪が、月光に照らされて輝く。
「この世の全ての贅沢が思いのままになると、言ってもか？」

「贅沢は、好きじゃないの」

そっと、距離を置くように後ずさるけれど、意味が無いらしい。
いつの間にか覆面集団にすっかり囲まれていた。

「あのお方に望まれる幸せが、わからないのか？」

「主とか、あのお方とか・・・そんな言い方されてもわからないわ」

「この手を取れば、教えてやる」

「いや！」

走って囲みを抜け、逃げようとするが足を引っ掛けられて、思いっきり転んでしまう。
膝、絶対ずるむけだ。
金色の髪の男は私を引っ張り上げると、腰に手を回して持ち上げた。

「やだっ、何するの！？」

「黙っていろ。・・・・主のものを傷つけるとは、生かしておけん」

男の目と、いつの間にか剣を持っていた右手は、私を転ばせた覆面に向いていた。

「し、しかし・・・ラビツ様！」

「消えろ」

ザンッと肉を切り裂く音と同時に赤い血が吹き出る光景。

「いやあああああ！！」

目をぎゅっと閉じた。
男は何事も無かったように、私に囁いた。

「・・・・こうなりたくないだろう。大人しくしているんだな」

「う・・・」

血の匂いに、吐き気が込み上げてきた。

「いいこだ。　その調子で大人しくしていれば、あのお方にも可愛がって頂けるだろう。　長生きしたいだろう？」

縦でも横でも、首を振れば吐いてしまう。
涙なんて、出てこない。

体が震える。

（誰でもいい・・・悪魔でも天使でも！）

誰か助けて。

全て夢だといって！！
男は私を抱えなおすと、移動を始めた。

「撤収す・・・、っち！」

ヒュッという風を切る音と共に、金属のぶつかり合う音が響く。

（今度はなによ！）

「・・・貴様」

「あいつへの献上品か。　もう少し何とかならなかったのか」

綺麗な、深い声。
吸い寄せられるように、その声の主を見つめる。
黒い、黒い衣と髪のひと。
けれど、その瞳だけは晴れた空みたいな、透明な青。
一生耳に残りそうな激しい金属音。
それが私の五感にこびり付いてしまった。
もう、目が離せない。

「見目は、どうにでもなる。重要なのは主との相性だ！」

「違う」

今にも振り落とされそうな勢いの中、私は声を張り上げた。
張り上げたつもりだが、蚊の鳴くような声になってしまった。
「・・・たす、けて」
聞こえたのか、そうでないのか判らないけれど、確かにその人は頷いた。
キンッ
高い金属音が響き、ラビツとか言う男の手から剣が飛ばされる。
叩き落した黒髪の人は、息も上がっていない。
鋭い銀の切っ先を私に向けた。
「その子どもを下ろせ。でなければ、斬る」
私が子ども!？
しかも斬るなんて、助けてくれるんじゃなかったのっ！？
「くそっ」
「わっ」
投げ捨てるように私を解放すると、霧のようにその姿を消した。
残ったのは、私と・・・。
「――ありがとう。　助けて、くれて」
とりあえず、助かったはずだ。
私が振り向いてお礼を言えば、そいつはふんと鼻で笑う。

「お前を助けたんじゃない。　保身のためだ」
意地悪なことを言われても、感謝の気持ちは鈍らなかった。
血で濡れた剣を拭い、鞘に戻す。
その仕草が、何と言うか、綺麗で目が放せない。

「あの、」

「さっさと家に帰るんだな。　また献上されないように」

家・・・
そうだ。帰らなくちゃ。
でも、今やっと気付いた。

ここは公園じゃない。
いつまで経っても動かない私に、男は不審の目を向けた。

「何してる。　腰でも抜けたか」

ククっと口元を歪ませて、馬鹿にしたように笑われる。
実際それも理由なので、反論できないのが悔しい。

「ち、違うの！　ここがどこだかわからなくて・・・」

口にすると、涙が出そうになった。

「なら立て。　とりあえず森から出れば・・・」

ふ、と男の言葉が途切れ、そのまま凝視される。

見たことがないくらい綺麗な顔で、見つめられて、どこかに消えてしまいたくなる。
どうかしたの？　と訊ねようと思ったのと同時に、男はとんでもないことを言い出した。

「足を見せろ」

「え？　――きゃっ！」

いきなり片足を引っ張られ、バランスを崩して地面に手をつく。

「何すんのっ、変態っ！」

た、短パンはいてて良かった。
男はじっと私の膝の傷口を見て、ぽつりと呟いた。

「血が出ている」

そして私の見ている前で、膝の傷口を舐めだしたのだ。

「っちょ、や、あ、・・・・」

ぞくりと、寒気とは違うものが、全身に走る。

「子どもだな」

血を舐め取りながら、私に妖艶に微笑みかける、悪魔だ。
こいつは。

「ふぇ・・・」

泣きそう。
ちゅっとわざと音を立てて離れたそいつの唇は、私の血で赤くなっていた。
それを親指で拭い、全て舐めきる。

「・・・・あいつがお前を望んだ理由がわかった」

何もしていないのに、むしろされていたのに、・・・どうして息が上がるの？
胸がドキドキして、苦しい。

「お前、人間だな？」

ニンゲン。
私はいつの間にか目の前に居た男に眼を向ける。

「・・・人間、だけど、」

それがどうしたの？
あなたは・・・人間じゃないの？
私の思考を読んだのか、男はにやりと笑った。

「ここが何処だかわからないと言ったな？　教えてやろう」

ふるふると、首を横に何度も振った。
けれど、その動きは頬に添えられた男の手に阻まれる。
お願い、・・・そんなに優しく、触れないで。
青かった瞳は、いつの間にか黄金に変わっていた。

お願ぃ。
目を、そらしてよ。
「名前を、教えろ」
「・・・・奏流・・・・」
頭の奥の芯がぐらぐらして、体がふわふわして、自分が自分じゃないみたい。
体も、言葉も、視線さえも。
もう、思い通りにはならない。
「カナル、それはお前の【血名】か？」
「けつ、めぃ？」
「お前の真の名かと聞いている」
真の名、なんて言われても。
それ以外に名前なんて無いのに・・・
こくりと、頷く。
男は満足そうにした。
両手で私の頬を大事そうに包むと、優しい声と表情で惑わす。
頭がクラクラしてくる。
クツクツと喉の奥で笑いながら、唇を私のそれに寄せようとする。
「・・・・その顔なら、女に見えるぞ」

――――ちょっと待ってよ。
ぼうっとしていた頭は、わずかに覚醒し始めた。
金縛りのように自由にならなかった体が、軽くなり始める。
奪われそうになった唇を、掌で守った。

「――――女に見えるんじゃなくて、女なの！！」

子ども扱いしないで！
叫んで、涙目で思いっきり睨みつけると、男は唖然とした表情で固まった。

「私、もう１６歳なんだから！　それにべたべた触んないで！」

ドンと突き飛ばすと男はよろめきもせずに、舌打ちした。

「呪縛を解いたのか」

「おかしな魔法もかけないでよね！」

こんなにも、他人に対して怒りを覚えたのは久しぶりだった。
人を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ！
そう言って立ち上がり、逃げ出してしまいたくなる。
なのに、足はまだ震えて、立つことなんて望めそうに無い。
仕方なく、目の前の失礼な男を睨みつけることにした。

＊＊＊＊＊＊

「・・・・・奏流・・・・・」

俺の魔力に酔った少女は、花弁のような唇から自分の血名を易々とこぼした。
内心、馬鹿だと笑った。
こんなにも簡単に、出会ってすぐ呪縛にかかる者などそうそういない。
呪縛は、かける相手から信頼を得なければならない、高度な術だ。
恐らく・・・人間の馬鹿に多い、他人をすぐ信用してしまうタイプ、だろう。
子どもっぽい反応と、思ってることが何でも顔に出る単純さ。
久しぶりに、純粋に近い人間を見た。

これならば・・・・
カナルを使えば、より強く、純度の高い魔力を得られるはずだ。
俺はカナルを手に入れることにした。
けれど予想外の展開になった。
後一歩と言うところであっさり呪縛は解かれてしまった。
これでは、この先しばらくは、呪縛できそうに無い。

さて、どうしたものか。
目の前の少女は涙目で睨みつけている。
俺を。
子ウサギに睨まれているようで、全く怖くないのだが、少し可哀相に思ってしまった。
本当に、子どもだ。
人間の１６と言えば、こちらではもう成人だ。
俺はこの子ウサギをてなづける為、とりあえず謝罪した。

「悪かったな」

「・・・・・もう、変なことしない？」

「ああ。　誓う」

誓いなんて、俺たちには道端の石ころのようなもの。
なのに、カナルはほっとした顔を見せた。
ほんとに、馬鹿だ。

「教えて。　ここはなんなの？」

落ち着いたのか、俺にそう尋ねてくるカナル。
目に溜まった涙は、今にも溢れ出てしまいそうだ。

「お前たちの言葉で言うと、魔界、か」

大昔は、人間の世界も、この魔界も、ところどころにあった扉で繋がっていた。

何千年も前に、それらは全て閉じられてしまったのだが。

「何で、私はここにいるの？」

この調子だとしばらく質問攻めだな、と覚悟して、答えてやる。

「この魔界をすべる者、まあ簡単に言えば魔王が、人間を欲したからだ」

餌には、純粋な魂のほうが適している。
純粋な魂と血肉は、魔界の者にとって、最高のエネルギー源だ。

「どうして・・・・私なの？」

「さあ。それは本人に聞かなければ分からない」

本当は分かっているのだが、あえて教えないことにした。

「じゃあ」

カナルはまばたきをし、俺を見つめる。
そのひょうしに涙が零れ落ちた。

「あなたは、誰？　どうして助けてくれたの？」

俺は苦く笑った。
さて、困った質問だ。

「俺のことは、アシュと呼べ。　お前に俺の血名は教えられない」

「アシュ・・・」

「さっきも言ったとおり、お前を助けたのは、俺の保身の為だ」

ここまで言っても分からないのか、カナルは首を傾げる。
その様子が、可愛いと感じたのは恐らく気の迷いだ。
人間なんかに、惑わされる俺ではない。

「魔王と俺ははっきり言えば、敵対している。　魔王がワケありでお前を欲したなら、俺はそれを阻止しなければならない。　あいつの行動の目的は今のところ、全て俺を殺す為のものだからな。　・・・わかったか？」

こくりとカナルは頷いた。
また涙が零れ落ちる。
俺は零れ落ちた涙を見て眉を上げた。

「・・・・俺は、あいつがお前を手に入れるのを、絶対に阻止しなければならない」

「・・・？」

カナルは俺が注視していた彼女の足元へ視線を落とす。
カナルの涙は、魔界の空気に影響されて、全て宝石に変わっていた。
呆然としているカナルの前で、俺はそれを全て拾い集めて、彼女に見せた。

「なかなか見事だ。　金剛石に、真珠・・・紅玉石に、青玉石か」

どれも元が涙なので粒は小さいが、純度は高い。
魔力を持つものは総じて、宝石のような光るもの、または美しいものに目が無い。
渡してやろうと彼女に手を出させるが、どうも様子がおかしい。

顔が真っ青で、目の焦点が合っていない。

「カナル？　どうした？」

ふらりと彼女の体が揺れたかと思うと、気を失ってしまった。

「っおい」

慌てて抱きとめるが、完全に眠っている。
華奢な体は、俺の一ひねりで簡単に折れてしまうだろう。

「まいったな・・・」

まさか、気を失うなんて、予想外だ。
おそらく、自分の涙が宝石に変わったことが、ショックだったんだろう。

仕方なく俺はカナルを抱き上げると、寝かせることの出来る場所を探した。

森（後書き）

大昔に書いた小説ですが・・・読み返すと恥ずかしいです。

人間

俺はカナルを、森の中で少し開けた、泉がすぐ傍にある場所に横たえた。
上に、俺の羽織っていたマントを掛ける。
さて、これからどうする？

連れて歩くのは構わないが、問題はそれがいつまでか、ということ。
出来れば彼女を利用したい俺としては、連れて歩きたい。
カナルは必ず、元の世界に帰りたいと言い出すだろう。
それはとても難しいことだ。

簡単なのは、連れてきた者の魔力で帰ること。
そうすると、カナルは捕まってしまうか。

(帰りたいなどと、言わせなければいいか)

その時の俺は、ただ自分のことしか考えていなかった。
カナルを利用することだけ。
それは、彼女にとって、俺の憎んでいるあいつと同じだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「う・・・・」

ふ、と重たいまぶたを開けると、目を閉じたアシュさんが居た。
その綺麗な造形を眺めていたら、彼はすぐに目を覚ました。

「気分はどうだ」

倒れたから、心配してくれているのだろうか。
こくりと頷くと、ゆっくり引き寄せられた。

「あ、の」

シャラリと首元で音がした。
銀のアンティーク調の鎖の先に、金色の石がはめ込まれたネックレス。
金の石は、あのときのアシュさんの金色の瞳を思い出させた。

「つけていろ。お前を魔力で守るはずだ」

指先で触れると、冷たい石が温かみを持った気がした。

「ありがとう・・・」

この人に、私はお世話になってばかりだ。
きっと倒れた後も色々と世話してくれたのだろう。
ぐっすり眠ったことで、気分が少しすっきりしたみたい。
辺りはもう明るくなり始めていた。
青に戻った瞳で見つめられ、身動きが取れなくなる。

「忘れていた。持っていろ」

「？」

渡されたのは、皮袋に詰められた、色とりどりの宝石。

なんだっけ、これ。
不思議そうにする私に、アシュさんが長い溜息をつく。

「お前の涙だ」

あ・・・
そうだ。

でも、どうして涙が石に変わったんだろう。

「・・・魔界の空気に影響されたんだろう」

私の気持ちを読んだように答えたアシュさんに、疑惑の目を向ける。
彼は眉間にしわを寄せた。

「なんだ」

「私の考えてること、分かるの？」

「お前は相当単純な人間らしいな。　読む必要さえない」

つまりは、だだ漏れ。
何だか恥ずかしくなって、目をそらしてしまう。

「何を恥ずかしがっている」

「べ、別に、なんでもないから」

普通、思考が漏れているとわかれば、恥ずかしいものだ。
それより、今はそんなことより聞きたいことが山ほどあるのだ。

私の、一番聞きたかったこと・・・

けれど、聞いた結果が怖くて聞けなかったことを、訊ねた。

「私、どうやったら、元の世界に帰れる？」

「それを、起きたら話そうと思っていた」

と、アシュさんはさりげなく私の腰に手を回す。
そのまま膝の上、いや腕の中に引き込まれた。

「あ、あの、その、えと」

「なんだ。言いたいことがあるなら言え」

ふ、と顔の目の前で微笑まれて、何も言えなくなる。

お、下ろして欲しいよ・・・
けれど、その気持ちだけは無視するアシュさんだった。

「お前の帰る方法だが」

「！」

私は抱き上げられた緊張も忘れて、食い入るように彼の顔を見つめた。

「無い訳ではないが、・・・とても難しい」

それでも。

「聞きたい、です。教えて下さい」

アシュさんは難しい顔をして溜息をついた。

「簡単なのは、お前をこちらに呼び寄せた者に、もう一度帰してもらうこと。まあ、それは無理だな」

「・・・・他には、ないの？」

無いのだとしたら、私はこれからどうしたらいいの？
この世界のことなんて、何一つ分からないのに。

「もう一つ、あるにはあるが」

もったいぶって、意地悪な笑みを浮かべる。

この人は、やっぱり悪魔なんだ。

「交換条件？」

「よく分かったな」

くくっと口元を歪ませて、私を更に強く抱きしめる。
・・・・ドキドキ、止まって。
これから悪魔と契約するんだから。

「この魔界で、宝石よりも何よりも、強く魔族が望むものがある」

・・・・それってもしかして。

「――人間？」

「正解・・・。正確には、生きた人間だがな」

どうしてかな。

「人間の血肉は、俺たち魔界の者に魔力を与える」

好きな人に囁かれるみたいに、ドキドキしてる。

「お前を、元の世界に帰してやる。帰るまでも、守ってやろう」

こんな、とんでもないことを言われているのに、怖くない。

「その代わり、俺が望むとき、魔力をよこせ」

YES？　NO？

もう答えは、決まってるでしょう？

「・・・・昔、おじいちゃんが、悪魔とだけは約束しちゃいけないって」

「アクマ？　何だそれは。よく分からんが、そんな奴らと一緒にするな」

少しゆるめられた腕の中で、アシュさんを見上げる。

「俺は魔族だ。　魔族は己にとって利益のある誓いは必ず守る」

「・・・・うん」

知ってるよ。

＊＊＊＊＊＊＊

・・・・意外と大人しいな。
もっと激しく抵抗したら、どうしようかと思っていたが。
こいつ、本当に人間か？

『人間の血肉は、俺たち魔界の者に魔力を与える』

そう言って、怖がると思ったのに。
震えもせず、黙っていた。

『お前を、元の世界に帰してやる。帰るまでも、守ってやろう』

そう言っても、喜ぶわけでもなく。
カナルの心臓は、抱きしめた時から変わらず、激しい。

『その代わり、俺が望むとき、魔力をよこせ』

・・・そんな途方も無い要求に
彼女は平然と切り替えした。

「・・・・昔、おじいちゃんが、悪魔とだけは約束しちゃいけないって」

アクマ、だと？

「アクマ？　何だそれは。よく分からんが、そんな奴らと一緒にするな」

少し腕をゆるめると、熱でもあるかのように潤んだ瞳が、俺を捕らえる。

「俺は魔族だ。　魔族は己にとって利益のある誓いは必ず守る」

この場合、俺には途方も無い利益がある。
カナルにとっては、賭けも同然だがな。

「・・・・うん」

微笑さえ浮かべて、カナルは承諾した。

その時彼女の心から溢れ出ていたのは

恐れでも

疑いでもなく

俺にとっては、嘘のような感情だった。

＊＊＊＊＊＊＊

うんって言っちゃった。

これってOKしたことに、なるんだよね、やっぱり。
でも、ひとつ気になることがあった。

「あ、あの」

「なんだ」

「魔力って、どうあげたらいいんですか？」

血をするとか、指を切り落として食べるとか。
そんなことだったら、嫌だ。

「知りたいか？」

ふ、とアシュさんが妖しく微笑む。
こくりと頷くと、頬に手が添えられた。

「実践が一番分かりやすいか？」

「え」

そう言われ、唇を奪われた。
目を閉じる時間も、与えられずに。

「・・・っふ、ん」

最初は重なるだけの優しい口づけだったのに、だんだんと深くなっていく。
苦しい。
――キスのとき、息ってどうしたらいいの？
唇が一瞬離れたと思えば、額や頬にキスを落として。
また、唇に戻る。

今度は頑張って抵抗したけど、下唇を甘噛みされ、あっけなく侵入される。

「・・・・ちゃんと応えろ」

「やぁ、無・・・」

理、と言い掛けた唇を、また封じられる。

解放されたときには、もう全身から力が抜け切っていた。
アシュさんの胸にもたれるような姿勢で、荒くなった息を整える。
くくっと、頭の上から笑いを押さえるような声が漏れ聞こえた。

「口付けの一つも出来ないで、よく俺と［契約］できるな？」

「ひ、・・・ひどい」

あんなキス、知らない。
男の子と付き合ったことなんてないし。
ファ、ファーストキスだったのに・・・・。

「まあいい。慣れればもっと気持ちいいはずだ」

「もういらない・・・・」

キスって、

もっと優しくて、幸せなものだと思ってた

アシュさんのキスは、されてから暫く動けなくなることが分かった。
体の奥が、甘く熱を持っている。
慣れない感覚に加えて、彼はさっきからずっと、私の頭やら髪やらを撫でていた。
眠りに誘うように。

「一度眠ればいい」

やだ。
まだ、話したいことがたくさんあるんだから・・・
けれど、その気持ちを口にすることも出来ず、私は誘われるまま眠りに就いた。

＊＊＊＊＊＊＊

「参ったな」

腕の中の少女が眠りに付いてすぐ、俺は深い溜息をついた。
カナルから得た魔力は、やはり極上。
けれど、それは彼女の体に少なからず、負担を与えるらしい。
現に、少女は魔力を奪うためのキスひとつで、疲れきって、眠ってしまった。

「そう沢山はできない、か」

まあ、極上の味に慣れるのも、つまらないしな。
俺はまだすやすやと眠るカナルに、今度は魔力を得られないキスを落とした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・・ん？」

目を開けると、そこは綺麗な庭園。
中央には噴水、その周りの遊歩道は色とりどりの花たちで趣味よく飾られている。
自分の好きな、バラの花が随分沢山あった。

「きれーい。誰のお庭かな・・・」

勝手に入って怒られないかな。
でもどうやってここに来たんだっけ。
うーんと悩んでいると、後ろからくすくす笑う声がした。

むっとして振り返ると、其処には・・・

「きれい・・・」

そう、思わず口にしたくなるような美青年。
漆黒の髪に、緑の瞳。
その顔立ちは、誰かを連想させた。

「・・・ありがと、褒めてくれて」

見惚れている間に距離を詰められ、急いで後ずさる。

「どうかした？」

「あ、えと、・・・・ただの条件反射です」

この世界に来てから、少し用心深くなったかも。

「安心して、何もしないから」

バラは何色が好き？　と微笑まれて、張りつめていた緊張の糸を、あっさり解かれた。

「一番好きなのは、ピンク！」

「了解、お姫様。こっちへ来て」

とことこついて行きながら、ある考えに辿りついた。
この人って、もしかして、お花屋さんなのかな。
こんなかっこいい店員さんがいるなら、毎日でも通いたいっ！

「はい、どうぞ。棘は取ってあるからね」

たくさんあるバラの中で、一番きれいに咲いた子を差し出された。

「いいん、ですか？」

鼻先に持ってこなくても分かるくらい、甘い香り。

「君の為に咲いたバラだ」

「でも私、お金持ってなくて」
こんな綺麗なバラは、近所のお花屋さんにも無かった。
夢の無い話だけど、とっても高いに違いない。
申し訳ない気持ちと、バラが欲しい気持ちの狭間で言うと、また笑われた。
「お金なんて、要らないよ。　言っただろ？　君の為に咲いたバラだって」
「じゃあ、頂きます」
差し出されたバラに手を伸ばす。
けれど、あと少しというところで、体が少しも動かなくなった。
か、金縛り！？
「残念、彼が君を呼び戻しているようだね」
か、彼?
って、まさか・・・。
「また、おいで。カナル」
ふわりと微笑まれ、同時に違和感を感じる。
私、名前言ってないのに・・・。
「そんな不安そうな顔しないでよ。大丈夫、また会えるから」
「あ・・・」

急に全身を締め付けられるような不快感に襲われ、そのまま気を失った。
目が覚めて最初に、金色の光に、襲われた。

「ア、シュさん？」

「やっと起きたか、この馬鹿が」

ば、ばかって、ひどい。
さっきまで物腰・口調共に柔らかな美青年と接していたせいか、アシュさんが、悪魔に見えてしまう。
・・・そりゃこの人が、かっこよくないわけじゃないけど。
さっきの人とはタイプが違うけど、絶対日本のモデル雑誌を占拠できる。
そのくらい、アシュさんはかっこいい。

「おい、本当に起きてるんだろうな」

確かめるように頬を撫でられて、びくりと体が反応する。

「・・・・欲求不満か？」

ニヤリと失礼なことを平然と言われ、顔が急に熱くなった。

「ち、違うの！！　あ、アシュさんが、あああんなことするから」

「あんなこと？　ああ、口付けのことか」

もう・・・っ、どうして口に出すのよー！！
折角言わないでおいたのに。
そんな私の考えをまた読んだのか、彼はニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべた。

「残念だが、暫くはお預けだ」

「ふぇ」

お預け？　じゃあ、もうしなくていいんだ！
よしっと心の中でガッツポーズをすれば、呆れたような目で見られ。

「・・・そんなわけ無いだろう」

天国から、地獄へ突き落とされる。

「じゃあ、どうゆうこと？」

ニヤリと再び笑みを浮かべると、アシュさんは一度私を膝から下ろした。
そういえば、ずっと抱えられてたんだ。
重かったんだろうなー・・・

「安心しろ。お前はもう少し肉を付けたほうが美味そうだ」

「っ！」

いきなりの変態発言に、顔が火照りだす。
そんな私なんてお構い無しで、アシュさんは静かに話し出した。

「俺が思っていたより、人間は弱い存在だな」

「?」

話の趣旨が分からない。
そうしていると、はあ、と深い溜息に、また馬鹿にされてしまった。
「魔力を貰うと、その分に比例して、お前の体力が奪われるようだ。つまりやり過ぎると、お前は死ぬわけだ」

「そ、うですか」

死ぬ、何て物騒な言葉に、震えが走る。
「安心しろ、死んだ人間など価値が無い。お前は生かしておいてやる」

「それはどうも、ありがとうございます」

少々ぶっきらぼうに返事をするが、仕方ないだろう。
その時ふと、疑問が浮かんだ。

「ね、人間って、魔力を与えること以外に、何かあるの?」

例えば、あの宝石になった涙のように。
どんなことが出来るのか知っておけば、少しは役に立つはずだ。
身を守るために。

「知りたいか?」

「実践抜きで」

二度目の失敗はしないようにと、予防線を咄嗟に張るが、それはあっけなく崩れた。

ふっと、アシュさんが薄気味悪い微笑を浮かべる。

この展開ではろくなことが無いだろう。

そして、その予想は大当たりだった。

「俺としたことが、躾け方が足りなかったな？　他人にものを頼むときはどうするんだ？　カナル」

名前で呼ばれて、体のどこかが疼く。

「え、あ、その」

「勿論、『お願いします』の一言じゃ、俺は動かないが」

「・・・・宝石、欲しい？」

代価を求められた気がして、皮袋を差し出すが、相変わらずの微笑みは消えない。

「言っただろう。魔族が最も求めるものは」

「・・・・・にんげんです」

絶望感に襲われながら答えると、満足そうな頷きが返ってきた。

同時に、腕をとられて、優しく引き寄せられる。

まるで、甘いひと時を過ごす恋人達のように。
「俺に頼みごとをしたいときは、お前から口付けろ」
「そんなのヤダ！」
「なら、何も頼むな。質問もするな」
目の前のニヤニヤ顔が、うらめしい。
「どうする？」
「うぅ・・・」
改めて思ったけどこの人、絶対Ｓだ。
うんうん葛藤していると、腕を？まれていた力が緩んだ。
「早く決めろ。・・・俺の気が変わるかも知れん」
「ま、待って！」
「なら、どうするんだ？　カナル」
ここぞというときに、名前を呼ぶのは反則だと思う。
呼ばれただけで、全部どうにでもなっちゃえって気分になるんだもん。
でも、女は度胸と愛嬌だし。
それに、今の私には、この人しか頼れない。

「・・・こっちでの、人間のことと、私の帰る方法について詳しく教えて下さぃ」

そして、震える唇を、彼の冷たいそれに重ねた。
すぐに唇を離して、恥ずかしさに俯いていると、上から噛み殺したような笑い声がした。
この人、本当によく笑うなぁ。
特に、人を馬鹿にするときとか。

「大きく出たな。まあいい。最初くらいは許してやる」

ほっとするのもつかの間、すぐに唇を奪われる。
油断しきっていたせいで、口内への侵入を許してしまった。

「・・・ん、ぅんっ」

舌が、私のそれを誘おうとして動くけど、応えられない。
少し早めに解放され、二度もこんなことをした悪魔を最後の力で睨みつける。

「ふん・・・そんな顔をしても駄目だ」

ぺろりと耳の後ろを舐め上げられ、最後の力も尽きてしまった。
アシュさんの胸に倒れるようにもたれると、抱き上げられ、眠っていたときのような体勢にされた。
彼の左胸に、右の頬をつけて。
あまりのだるさに、全身を預けきってしまった。

「子どもだな」

「子どもじゃ、ないもん」

脱力しきった声じゃ、説得力は皆無だ。

「俺の口付けに応えられるようになったら、女として認めてやる」

そんな日は、暫く来そうにない。

アシュさんは私の髪を梳きながら、子守唄を歌うように、［人間］について教えてくれた。

「人間の血は、一滴で魔族の寿命を百年延ばす。骨で練り上げた剣は、決して折れることが無い。肉は口に含むだけで、最高の魔力が得られる。後は・・・」

「も、もういいです」

これ以上訊いたら、怖くて夜眠れなくなる。

怖くてアシュさんの服の裾を掴んでいたら、少し強めに抱きしめてくれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「そうか？　・・・どれも素晴らしい［人間］の使い道だが、俺はお前の涙が最も優れたものだと思うぞ」

美しい宝石に代わる涙。

それは、純粋に限りなく近い魂を持つカナルだけに許される、奇跡だ。

「ほんと？」

「ああ」

「ありがと」

ふわりと、嬉しそうに笑う。
その顔は、誰にも見せたくないと思った。
お前は、俺だけの為に泣いて、俺だけの為に怒って、・・・そして笑っていればいい。

「人間のことは、はっきりしたことは研究中で分からない。まあ、ばれなければ良いだけの話だ」

他の魔族にな。
そういうと、カナルは不安そうな顔になる。

「ばれたら、どうなるの？」

「さあ。・・・訊かない方が良いぞ」

「そうする・・・・」

青い顔で何度も頷き、怖くなったのか、俺の胸に寄ってくる。
その仕草が可愛いと思ったのは、俺だけの秘密だ。
カナルがこの世界にやってきたのは、昨日の真夜中。
二度の眠りと目覚めを経て、空にはまた月が昇っていた。
この世界で、一日を過ごしたわけだ。

「人間のことは、もういいよ。今度は帰る方法を教えて？」

「その前に、そろそろ火を焚いたほうがいいな」

夜の森は、人間には危険だ。
カナルを膝から下ろし、彼女の周りに結界を張った。

「すぐ戻る。大人しくしていろ」

＊＊＊＊＊＊＊

何だか、アシュさんが優しい気がした。
そんなわけないよね？　だって、私は餌みたいなものだもん。
でも、抱きしめてくれる、腕の感触はとっても好き。

「遅いなぁ・・・」

すぐ戻ると言って、大分経つ。
本当はそんなに経っていないのかもしれないけど、月明かりだけの暗闇は、時間を遅く感じさせる。
昼間に眠ってしまったせいで、目も覚めているし。
こうなると、ついつい考え事をしてしまう。

帰る方法（後書き）

各話の区切りがおかしいと感じたらごめんなさい。
読みづらい点は教えていただけると嬉しいです。

帰る方法2

そういえば、夢の中のあの人は誰だったんだろう。
アシュさんに、少し似ていたけど。
綺麗なバラの庭園・・・。

考えを廻らせていると、鋭い視線を感じた。
暗闇の奥から・・・

「誰か、いるの？」

絞り出した声は自然と震えてしまった。
答えるように姿を現したのは、銀色に輝く毛並みをした、大きな狼。
瞳は、暗闇のようなブルーグレー。

「きれい・・・」

食べられるかもしれないのに、怖くは無かった。
狼は私のほうにのそりと近寄ると、くんくんと匂いを嗅いだ。
まるでワンちゃんみたい。

「ね、狼さん。触ってもいいですか？」

とってもきれいな毛並みなのだ。
動物好きとしては、触らずにはいられない。
狼がくすりと笑ったように見えた。

「ああ、構わないぜ。可愛いお嬢ちゃん」

「喋れるの？」

「朝飯前さ」

お言葉に甘えてそろそろと手を伸ばすと、ふわりとした毛が手に触れた。
気持ちいい。
そのままぎゅっと抱き締めると、お日さまの匂いがした。
幸せだな、と目を閉じた。

「・・・・・何をしている」

背後から、底冷えするような声が響くまで。

「・・・・・っアシュさん！」

ぐいっと腰に回された手で引っ張り上げられる。
強く抱き締められて、息をするのも苦しい。

「お前、ジンか」

少し厳しさの和らいだ声にほっとする。

「よう。人間なんか連れて、どういう風の吹き回しだい？」

ふざけた口調。
知り合いなんだろうか。
――――でも、ちょっとまって。

「に、人間？」

ど、どうして分かっちゃったんだろう。

「匂いで一発だ」

に、匂い？
人間臭いってことかな。

「あ？　違う違う、美味しそうな良い匂いってことだよ」

そっかぁ。
てゆうか、やっぱり考えてること漏れてるんだね・・・。

「何のようだ」

アシュさんの冷たい声がした。
一度抱き締められていた腕が緩み、今度は優しく胸の中に隠される。
どうしてか、そうされると、とてもほっとするのだ。

「用なんて無いけど？　近くを通りかかったら、良い匂いがしたから、ついふらふらと」

多少演技が混ざったように言う狼に、思わず笑いが漏れてしまった。

「お、かーわいいー。　名前は？」

「カナルです」

「！」

名前を言った瞬間、アシュさんに強く睨まれて、びくりとする。
そうだ、ここでは、本当な名前は言っちゃいけない・・・。

「馬鹿が」

「ごめんなさい・・・」

厳しい口調と違って、頭を撫でる手つきは優しい。
まるで、宥めてくれてるみたいだ。

「ジン」

「はいはい、聞かなかったことにしますよ」

でもなあ、と後ろ足でガガガと首を掻く。

「その子血名しか持ってないのか？　不便じゃねえ？」

「そうだな・・・」

このままでは名乗るときに黙りこくる事になってしまう。
それでは、色々怪しまれてしまう。

「カナル、お前、字の形はないのか？」

「字って、漢字？」

咄嗟に頭に思い浮かべると、伝わったようだ。

「字に形があるなら、大丈夫だな」

「どーゆうこと？」

理解に苦労していると、足元にふわふわのジンさんが寝そべって、説明しだす。

「つまりさあ、こっちの文字と、君の世界の文字は違う形をしてるだろ？　血名で誰かを操ったりするなら、音と字の形が一致しないといけない」

うんうんと、ジン先生の講義に耳を傾ける。

「こっちの者に音がばれたとしても、君が教えない限り、形まではわかりっこない。　だから、血名を名乗ってもカナルちゃんの場合は平気ってことだ」

「字の形さえ教えなければいいのね？」

「そゆこと」

本名で名乗っても大丈夫。
それだけで、不安が少し軽くなった。

「ジン、こいつ匂うか？」

「俺ぐらいの奴なら、すぐに分かるかな」

俺ぐらいって、どのくらいだろ。
人間ってばれちゃダメなのに。

深く考え込むアシュさんを見上げると、ふわりと微笑まれた。

「何とかする。お前は何も考えるな」

「・・・・はい」

「話しついた？　じゃ、俺の質問に答えてくれよ？　二人はどうやって出会ったわけ？」

うきうきと、尻尾をフリフリしながら訊くジンさんに、昔飼っていた犬のことを思い出した。

「へぇぇぇぇ」

狼の驚いた顔というのを、人生ではじめて見た。
うきうきしてる狼というのも、勿論初めて。
ジンさんの陽気で砕けた口調は、友達と話してるみたいだった。

「ラビツの野郎がねぇ。んで、其処に王子様が助けに来た、と」

「おうじさま？」

「ーーージン」

「あちゃ、もしかしてお前言ってねぇの？」

ちらりと隣を見ると、アシュさんの顔が般若みたいになっていた。
こ、怖すぎる。

変な沈黙が流れた。
誰も何も言えない空気だ。
でも、王子様ってなんだろう。気になるなぁ。
ううん、忘れよう。誰でも聞かれたくないことのひとつやふたつ、あるもん。

「あの、アシュさん、私聞かなかった事にするね」

そう言うと、驚きを含んだ青い目とかち合ってしまった。
アシュさんは、それはもう盛大な溜息をついた。

「・・・いや、教えておく。こっちへ来い」

「え、」

抵抗する間も無く、アシュさんの膝の上に乗せられた。
ジンさんが見てるのに、恥ずかしいよっ！

「いーなー。お姫様抱っこ。俺もしたいな～」

「え」

「お前は黙ってろ」

ジンさん、アシュさんの膝の上が好きなのかな。
おばあちゃんの膝の上が好きな猫みたいに。
でもアシュさんが動物を可愛がるところって、想像できないんだけど・・・。
頑張って想像していると、横から盛大に笑われ、頭の上からは盛大

な舌打ちが降ってきた。

「あはははは っ、ひー、腹痛いー」

「・・・・馬鹿が」

何何？
あ、考えてることばれちゃったんだ。

「カナルちゃん最高だね〜。 ちなみに俺がしたいって言ったのは、カナルちゃんを抱っこしたいってことだよ」

誰がさせるか、という呟きが聞こえたのは、きっと気のせいだよね。

「カナル、二度とそういうことは想像するな」

「・・・もし・・・・しちゃったら？」

おずおずと聞くと、例の怪しい微笑が返ってきた。

「こういうことになる」

「・・・ぅ・・・・んんっ」

濃厚な、意地悪なキス。
ジンさんの存在なんて気にしない、深い深いキスに、頭がくらくらする。
やっと解放されて、肩で息をしていると、慰めるような抱擁をされて。

「・・・分かったな？」

「・・・はい・・・」

もう、二度としないでおこう。

そう堅く自分自身に誓う他無かった。

＊＊＊＊＊＊＊

キスの後のカナルの表情をジンに見せたくなくて、俺のマントをかぶせる。
今の口付けは、勿論ジンへの牽制でもある。
俺のものだ、という意思表示をしておかないと、こいつはすぐに盛り出すからな。
口付けの前からニヤニヤしていたジンは相変わらず。
蹴り飛ばしてやりたいような顔だ。

「・・・アシュさん、お話・・・」

とろんとした表情と声は、充分にそそられる。
そんなものを他の男に見せて堪るか。
視界に入れさせるのも我慢ならない。

「また話す。寝ろ」

そう言うと、一度のキスで疲れきったのか、カナルはあっさり眠りだした。

「いいねぇ」

「何がだ」

「可愛くて、魔力も補給させてくれて、従順で」

最高の人間だ、といわんばかりの顔。

「こいつのこと、漏らせばお前でも承知しないぞ」

「いいけど、交換条件」

「言え」

にやりと、奴の本性が現れだす。

「話を聞いてる限り、カナルちゃんを元の世界に帰すんだろう」

カナルちゃんにその気がある限り、と。
裏を返せば、カナルにその気がなくなったら、ずっとこの世界に縛り付けておくのだろうと、ジンの目が訊いてくる。

「・・・ああ」

「なら行く場所は、王都以外には無いね？」

王都の大図書館。
カナルの帰る方法を探せる場所は、其処を置いては他に無い。
だが・・・。

「王都には魔王陛下がいるもんな？　結構大変な旅になると思うけ

ど」

「だから、何だ」

「俺も連れてってよ」

「・・・・・何だと？」

耳を疑った。
こいつはこれでも人狼族の長だ。
魔界でこいつ以上に魔力と発言力、そして権力を持つ人狼などいない。
幼い頃からともに育ち、まだ俺が王子で王宮にいた頃からの右腕だ。
ここ数年だけ、一族に帰っていて、さっき会ったときは驚いた。

「一族のほうは、どうした」

「俺はそろそろ、王宮勤めに徹していたいんデス。って言ったら、跡継ぎだけ決めてくれって言われて」
後は任せても大丈夫そうだし、とあっけらかんと言う。
溜息をつきたくなった。

「つーわけで、一緒に行くぜ？」
カナルちゃん可愛いし、気に入ったし、と余計なことまで口走る。

「勝手にしろ」
いてもいなくてもいいが、いれば戦いになったとき、助かるだろう。

そんなことを思う自分が情けないが、何しろ連れが非力な人間。
カナルの盾ぐらいにはなるだろう。

「こいつに手を出したら殺すぞ」

「その辺はお任せあれ」

ふざけた言い方に、どっと疲れが増す。

「火の番でもしてろ。俺も寝る」

「ひ、ひどいなー・・・」

再び俺の配下になるのなら。いや、共に来るのなら。
こき使うくらい、罪にはならないはずだ。

カナルをもう一度抱えなおして、浅い眠りに就いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「この間は残念だったね」

あ、またあの人だ。
また、あのバラの庭園。
でも今は夜だからか、この間とは全然印象が違う。

「この間？」

「覚えてない？　寂しいな」

「夢の人・・・？」

なんだろ。
少し頭がぼーっとする。

「そうだよ、カナル。・・・ううん、奏流」

どくんと、心臓が悲鳴を上げる。

なに？
なんでこんなに、ドキドキするの？
全身から得体の知れない汗が噴出す。

「何だ。まだ、彼に呼ばれてなかったの」

優しい声音なのに、どうしてこんなに怖いの？

「ねえ、奏流、早く僕のところへおいで？」

ずっと待ってたんだから、と手を伸ばし、頬に触れる。

「でも、あなたはどこに居るの？　あなたは・・・」

ダレナノ？

「僕は・・・・――」

私は其処で意識を手放した。

「カナル！」

強く呼ばれて、はっと目を開ける。
全身が、汗で濡れていた。

「あ、・・・・アシュさん」

「何を言われた」

誰に？　とは訊かないのだろうか。

「カナル？　しっかりしろ」

ぼうっとしていたところをまた揺さぶられて、少し気分が悪くなる。
酷い緊張状態に居たみたいだ。

「アシュさん、アシュさん」

怖い。
どうして、名前を呼ばれただけで、あんなに怖いの？

「カナル？」

「・・・・アシュさん」

どうしようもなくて、アシュさんに抱きついてしまう。
彼は少し戸惑って、そのうち優しく背や頭を撫でてくれた。
それだけで、安心して、涙を流してしまった。

＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・アシュさん」

そう言って、震えて怯えるカナル。
カナルに纏わりついている魔力の残り香が、彼女が誰に怯えているかを物語っていた。
抱きついてきたカナルを優しく抱きしめ、体を撫でてやった。
まだ怖いのか、安心したのか、彼女は大粒の涙を流し始めた。
それらはやはり、大粒の宝石に変わって。
まだ彼女の魂が無事であることに、俺は安堵した。

「カナル、大丈夫だ。大丈夫だから、落ち着け」

「、ふ、うん」

涙を拭いながら答えるカナルが愛おしくて
彼女の抱える不安を、全て拭い去ってやりたくなった。

「アシュさんに似てた、男の人」

「それは多分、魔王だ」

落ち着いたのか、カナルは少しづつ話した。

夢の中で会ったという男。

「何で、似てるの」

気になるのは其処なのか？

「魔王は、俺の伯父にあたる人だ」

「伯父さん？　若かったよ？」

「あれでも軽く、千年は生きている」

魔族は、中身だけ年を取る。
寿命も魔力に影響される。
ある程度年を取れば、そのまま死ぬまで若いのだ。
そう言うとカナルは、少しだけ笑顔を見せた。

「いいなあ、皺くちゃのお婆ちゃんにならないんでしょ？」

「まあな・・・何かされたか」

そう言うと、笑顔がまたくしゃりと歪み、涙を浮かべる。

「名前、音も形もあるやつ、呼ばれちゃったの」

「・・・・それで」

血名を呼ばれたなら、まずいことになったかもしれない。
先に俺が呼んでおけば良かった。

血名を呼ばれるのは、魔族にとっても、人間にとっても重大なことだ。
魔族が血名を許す相手はその長い生涯で限られている。

ひとつは、両親。

血名を与えるのは両親と決まっているので、これは呼ばれてもあまり問題は無い。

ふたつめは、伴侶。
生涯を誓った夫・妻となるもののみ、教えることがある。

みっつめは、主人。
忠誠を誓うときは、必ず血名を名乗るものだ。

そして主人も、時には血名で自分に従う者を縛る。

このみっつ以外では、決して血名を明かしてはならない。
命や、行動の自由に関わるのだ。
そして、カナルは知られ、事もあろうに呼ばれてしまった。

自分の意思に関係なく、血名を呼ばれた場合・・・

呼ばれた者は、呼んだ者に決して逆らえない。

「わ、私、早くおいでって、言われちゃった」

俺はカナルを抱きしめながら、頭を抱えたくなった。

最悪だ。

呼んで

「名前って、呼ばれちゃダメなんでしょう？　私、これからどうなっちゃうの？」

「・・・大丈夫だ」

夢を通して血名を呼ばれたなら、効果は多少薄くなる。
強く命令されない限りは、抗うことも出来るだろう。
そう言うと、カナルは少し静かになり、やがて意を決したように俺をまっすぐ見つめた。
揺るぎの無い、美しい瞳。

色の多様な瞳を持つ魔族でも、こんな色は見たことが無い。
黒に近い青。
近くで燃やしている炎の光がその瞳に映ると、まるで星を散らした夜空のようだ。
今は潤んでいるから尚更。

「アシュさん、お願い」

「・・・・言ってみろ」

何を言われるかは、大体想像がつくが、それは本人の口から聞くべきだろう。

「私の、血名を、呼んで下さい」

そう言い、カナルは自分から唇を重ねた。
・・・・お願いをするときの、キス。
緊張で震える唇を誘い、今までに無いくらい、深く堪能する。
初めて、カナルがこの世界に来たことを後悔した。
いや、・・・・出逢ってしまった事を。

こんなにも、深く・・・・・・深く愛してしまえば

もう二度と、奏流を離せないだろう。

俺は奏流を解放し、抱きしめていた腕を緩めて、目線を合わせた。
視線が重なり、彼女の緊張が嫌でも伝わってくる。

「・・・・本当にいいのか？」

奏流はこくんと頷く。

「お母さんが、女の子に必要なのは度胸と愛嬌だって」

俺は苦笑した。
お母さん、か。
血名を呼べば、その母にも会えなくなるかもしれない。
けれどそれは仮定の話だ。
奏流の覚悟を、無駄にはしたくない。

『奏流』

びくんと、彼女の体が震え、もともと大きな瞳が更に大きく見開か

れる。
『奏流』
もう一度呼ぶと、奏流はとろんとした表情になり、そのまま意識を失ってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊

『奏流』
名前を呼んでもらった瞬間、走った感情。
体中が熱を持って、今にも泣き出してしまいたくなる。
私がこの世界に来た理由が、少しだけ分かった。

『奏流』
アシュさん。
きっと、貴方に出会うため。
名前を呼んで貰うことが、こんなに幸せだなんて、知らなかった。
幸せで死んでしまいそうになる。
そのまま、私は意識を失ってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊

奏流が意識を失ったあと、そっと姿を現したジン。
その顔は、厳しく歪んでいた。
「・・・アシュ」

「分かってる」

言われなくても。

「カナルちゃんを、愛してしまうのは仕方ない。歴代の魔王達だって、よくやったことだ」

歴代の魔王たち。
扉がまだ繋がっていたころから、人間と婚姻する者は多かった。
より強大な力を、得るために。
けれど。
このままでは、俺と魔王との間で板ばさみになって、奏流は苦しむだろう。

「心配するな。人間界に、いずれは帰す」

「・・・・いいのか？」

「そういう［契約］だったからな」

「お前がいいなら、俺は従うよ」

奏流。
お前は絶対に、元の世界に帰してやる。
この世界で生きていくには、お前は弱すぎる。

キスマーク！？

愛しているから、別れが辛いんだ。
ならば最初から、愛なんて知らなければいい。

＊＊＊＊＊＊

――――――小鳥が鳴いてる。
――――――水の音がする。

ぬくもりの中で目を覚ますと、傍には見知らぬ男が眠っていた。
首筋にかかるか、かからないか位の銀の髪。
少し日に焼けた精悍な顔立ち。
深緑と灰色で統一された騎士のような服。

「っ・・・・」

誰？

見渡してもアシュさんの姿は無くて、急に不安になる。
ぬくもりの正体はまだ温かいアシュさんの真っ黒なマント。
に、に、逃げよう。
そうだ！　ジンさんは何処だろう？

「ん〜・・・まってよぅ・・・レザ・・・・」

男はぶつぶつ言うと、いきなりぱちりと目を開き、私を見た。
「お、おはよう、カナルちゃん」
「ああ、人間の姿は初めてだね。俺、ジン」
人懐こい笑み。
なんか見覚えあるようでないような・・・・
「え」
ジンさん?
狼だったのに・・・
「狼男なの?」
不安が解けて、ほっとしながら訊ねれば、うーんと首をひねられる。
「ま、似たようなもんだけど。月には影響されないよ。好きな時に狼になるんだ」
「へええー」
面白いなぁ。
「他にもそういう人、いるの?」
「いるよ、沢山。てか大抵は人の姿と、獣の姿の両方を持ってるんだ」

今日も朝からジン先生の講義らしい。
ジン先生は分かりやすくて大好きだ。
数学も教えてくれないかなぁ・・・。
「姿も魔力で影響されるね。ずっと人型を保っていられるのは王族か貴族。俺のような時と場合によりけりな奴等がほとんどで、人型になっても一部が獣だったりするものは、かなり下だね」
下？
「この世界では、魔力で身分も、持てる権力も変わってくるんだ」
そうなんだ。魔力って、本当に大事なものなんだね。
「ずうっと獣の姿の人は？」
ジンさんがふっと笑う。
「人型になれないものは魔族と言えない。そいつ等は魔獣というんだ」
ふむふむと頷いていると、ジンさんの大きな手が私の頭をくしゃりと撫でた。
「分からないことは、何でも訊いていいよ。これからずっと一緒だし」
「一緒？」

「奏流？　起きたのか」

ジンさんの後ろから、アシュさんが姿を見せた。
水浴びでもしてきたのか、アシュさんの髪はまだ濡れていた。
長いストレートの黒髪から、雫がぽたぽた落ちている。
い、色っぽすぎです。

あ、マント無いと寒いかな。

「アシュさん、マントありがとう」

アシュさんはちらりと私を見ると、いい、と言ってそのまま私の隣に座った。

「その服じゃ、人間だとひと目でばれる。次の町に着くまで着ていろ」

セーラー服、だけど、やっぱり目立つんだ。

「うん、じゃあ借りてるね」

アシュさんの匂いがして、気持ちいいんだよね。
アシュさんは一度私に微笑んでくれた気がした。
でも、すぐに目を逸らされる。

「ジン、何を話していた？」

「俺も一緒に行くって話」

そうだった、一緒に行くって何だろう。

アシュさんは少し嫌そうに話し始める。
何がそんなに嫌なんだろう。

「お前の帰る方法は、王都にある大図書館以外では調べられない。そこまでまだ大分距離があるし、長い旅になるからな」

「俺もついていくよってこと。道連れは多いほうが楽しいだろ？」

「ほんとっ？　やったぁ！」

何が嬉しいのか分からないけど、とにかく嬉しくて、ジンさんの胸に飛び込んだ。
私の帰る方法は、その大図書館に行けばわかるんだ。
旅行は大好きだし、ジンさんも大好きだし。とってもとっても、楽しくなりそう。

「ありがとうっ、ジンさん！」

ギュウってすると、ジンさんは困ったように笑った。

「どーいたしまして」

「奏流」

名前を呼ばれ、いきなり腰に回った手で引き寄せられる。

「アシュさん？」

どうしたんだろ。
怖い顔しちゃって。

何か悪いことしたかなぁ。
ジンさんが何でかくすくす笑っていて、それをアシュさんがひと睨みする。
二人とも、変なの。

「俺もさっぱりしてくる」

「帰ってこなくて良い」

そんな二人の会話にギクッとするけど、空気は険悪じゃない。
これが、日常なんだ。
ジンさんの姿が見えなくなると、体を回転させられて、アシュさんと向き合う体勢になった。
柔らかい、優しいキスをされる。
啄ばむように離れると、真剣な瞳で見つめられた。

「俺以外の男に触れさせるな」

「・・・・・・・え？」

どういう意味なの？

「お前は俺のものだろう」

モノ？　モノって、何？

「アシュ、さん？　よく分からないよ」

「分からないなら、どこかに閉じ込めるぞ」

そんなこと言われても、本当に分からない。
恋人に対して言うような、言葉だよね？
軽くパニックになっていると、鋭い舌打ちが降ってくる。

「馬鹿が」

「アシュさん？　・・・・きゃっ！」

いきなり胸元に顔をうずめられ、慌てて離れようとしたけど力では敵わない。
腰と背中は逞しい腕で押さえられている。

「、やぁ・・・ん・・・・、アシュさ・・・」

胸元や首筋に、甘い痛みが走る。
知らない、こんなの。

「アシュさん、こわい・・・・」

最後に鎖骨の真ん中にキスを落とされ、ようやく解放された。
体に力が入らず、そのまま抱きしめられる。

「・・・・お前は感じやすい体をしてるな」

クスクスと笑われ、穴があったら入りたい気分だ。

「アシュさんのばかぁ」

恥ずかしくて、今までに無かった感覚が怖くて。
私はとうとう泣き出してしまった。

それを見たアシュさんがしかめ面をする。

「何故泣く？　まさか男と女のことも知らないのか？」

「そ、それは・・・」

そりゃ高校生にもなれば、周りは色々経験し始めている。
付き合ったらどうゆう事をするのかも、・・・聞いた範囲なら分かる。
でも、私は何故かそういうことに興味が湧かなくて。
今まで何人かに付き合おうと言われたけど、全て断った。

だって、好きじゃないんだもん。
好きな人とじゃなきゃ、したくない。
キスも、その先も。
どうして私、アシュさんとキスしちゃったんだろ。
好きな人じゃないのに。
契約だから？　守ってくれるから？

「・・・・わからない・・・・」

その自分への呟きを、アシュさんは何か勘違いして受け取ったらしい。

「知らないのなら俺が教える。　どうなんだ」

教えるって、だ、男女のことを？
アシュさんと、するってこと！？
そんなの無理だ。

「し、知ってるけど・・・・・・ヤなの」

「・・・・俺が嫌いなのか？」

――――え？
視界がにじむ中、アシュさんの顔だけが鮮明に写る。
辛そうに、歪んだ表情。

どうして？
どうしてそんな顔をするの？

私は、ただの餌でしょう？

「はっきり言えよ。　俺が嫌いか」

「き、嫌いじゃないよ」

むしろ、こんなにも触れ合った男の人は初めて。
事情が事情だけど、それが事実。
嫌いなわけ、ないじゃない。
それに、はっきり言えなんて。

「・・・・どうして、心、読まないの？」

彼は魔族なのだから、その気になれば、私の心なんて覗き放題だ。

「わからないのか？　馬鹿が。　自分で考えろ」

俺に言わせるな。
その呟きだけ、優しいキスにかき消された。

＊＊＊＊＊＊＊

（あ～あ、出て行きづらいなぁ）

二人は見ている方が恥ずかしくなるようなシーンの真っ最中だった。
川で水を浴び、さっぱりして戻ってきたら、これだ。
咳払いでもして出て行くか？

（いや、やめよ）

あいつに殺されるに違いない。

・・・・・それにしても。

「なんか嫌ーな空気だなー」

人間がこの世界に下りたことは、多少力のある者ならすぐに気付いたはずだ。
そいつ等はきっと、血眼になってあの少女を探しているだろう。
かよわい、花のような人間の少女を。
沢山の女を見てきた自分だが、カナルのような女は見たことが無い。
一切濁りの無い瞳。
優しい心。
魔族の女は気性が激しく、大人しく見えても腹の中はどろどろだ。
いかに男を惹きつけ、自分の美しさを長持ちさせるか。
それぐらいしか考えていない奴が多いからな。
そういう女ばかり見ていると、彼女はとても新鮮だ。
全身全霊で守ってやりたいと、大抵の男ならば思うはずだ。
何よりも、あの少女が傷付けられるのを、黙って見て居たくない。

だから、この旅に付き合うことにしたのだ。
あいつといることで、彼女はいつか泣くことになる。
主の為にも、彼女のアフターケアは大事だ。

(何も・・・・起きなきゃいいけどな)

森中に漂う不穏な空気に、ゆっくり考え事も出来やしない。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・あ」

川面に映った自分の姿を見て、思わず声をあげてしまった。

(これって、キスマーク？)

きっと、あの時のだろう。

首筋やら胸元やらにまんべんなく咲いた花。

「どうしよう・・・・」

あの後ジンさんが帰ってきたおかげで、やっとアシュさんから解放された。
顔を洗いたくて近くの川まで来たのだけど。

(アシュさんのバカ・・・・)

恥ずかしい。
ジンさんもいるのに。

とりあえずアシュさんから借りたマントで首元を覆うことにした。
少し動けばすぐにずれてしまうので、油断は出来ない。
乱れた髪をとかし、頭の上でまとめた。
顔を洗う川の水はとても澄んでいて、キラキラと輝いている。
今は、何の季節なんだろう。

こっちと私の世界じゃ、時間の流れ方は同じなのかな。
もし違ったら、浦島太郎みたいなことになるのかな。
色々考えていると、溜息ばかり出てしまう。
幸せが逃げるからダメなんだっけ。

「奏流」

呼び声に振り向くと、木の幹にもたれかかったアシュさんがいた。

「遅い」

「あ、ごめんなさい」

慌てて駆け寄るとまとめたポニーテールが揺れた。
我ながら、うまくまとめることが出来た。
そう思っていたのに。

「わっ、な、何するの！」

彼の長く細い、それでいて男らしい指にあっさり解かれてしまった。
アシュさんは無言を貫いている。
無表情のまま解いた私の髪を、その長い指で口元まで運ぶ。
捧げるようなキスが落とされた。

「あ、アシュさん？　放して？」

受けた行為が恥ずかしくて、顔から火が出ちゃいそう。

「髪はまとめないほうが良い。　勿体ない」

「でも、動きづらいし」

アシュさんはじっと私を見つめている。
このままだと体中に穴が開きそうだ。
一体どうしちゃったのかな。
睨まれてるわけじゃないのに、冷や汗が出てきた。

「印も隠すな」

しるし？
って、キスマークのことですか！？

「むむむ無理！　恥ずかしいもん！！」

「見せるから意味がある」

はい！？
も、もしかしてこっちの慣習とかなのかな？

「そんな慣習は無い」

じゃあどうして・・・・

アシュさんはまた深ーい溜息をついた。

そういえばアシュさんて、『舌打ち』と『溜息』と、『人を馬鹿にした笑い』しかしてないんじゃない？
それって、性格的にどうなんだろう。
アシュさんの眉間に深いしわが寄る。

「またおかしなことを考えてるな」

「べ、別に？」

赤くなった顔を隠すため、ぷいっと顔を逸らす。
ふんっと鼻で笑われた。

「子どもでもそんなこと、しないぞ？」

「子どもじゃないもん」

「ああ、女だな」

え？
予想外の言葉に正面を向こうとしたが、その前に大きな掌で顔を固定される。
熱くてぬるぬるしてザラザラしたものが、耳を撫で上げた。

「ひゃぁんっ」

何何今の声！？　私の声？
執拗な舌の動きに、お腹の奥が熱くなってくる。
気持ち悪いのに、体は違う反応をする。
とにかく声だけでも漏らさないように、口元に手をやるけど、それもアシュさんに捕まってしまった。

耳を攻めていた舌は徐々に首筋、うなじへと移動していく。
その度に漏れる甘い声が、死ぬほど恥ずかしい。

「ちゃんと女の体だ」

最後に究極的に恥ずかしい言葉を掛けられ、解放された。
その頃には全身の力が抜け切っていて、アシュさんに支えて貰わないと、立つこともできなくなっていた。
その後は立てるようになるまで、彼の腕から解放されることは無く。
ジンさんの前でも、お姫様抱っこと言う恥ずかしい行為をされ続け、結局髪を縛ることは許してもらえなかった。

キスマークを隠すことだけは、最後まで譲らなかったけど。
うなじに落とされた新しい印に、私は気付けなかった。

パレタの町

パレタの町に辿りついたのは、夜が訪れようとしている頃だった。
棒になった足は、もう一歩も動いてくれそうに無い。

「弱いな」

「カナルちゃん、もしかして病気？」

道中何度も二人にそう言われた。

「病気じゃないよ」

そう言いつつも二人を見ていると、現代っ子は何かの病に集団感染しているのではと、疑いたくなる。
二人は息も切らさず汗も流さず、オリンピック中継で見た競歩並みの速さで、どんどん進んでいくのだ。
ついて行けるわけが無い。
予定では昼頃に着くはずだったらしい町にも、私のせいで夜になってしまった。

「とにかく宿を探そう、カナルちゃんはアシュとここに居て」

「はぁい・・・」

木造のベンチのような所に案内され、腰を下ろす。
両足の感覚はとうに無い。

隣にはアシュさんが座っていて、暫く何の会話も無くただ座ってい
た。
だけど、だんだん不安になってきた。
道行く人がみんな、私のほうを一度は振り返るのだ。
じいっと見つめる人までいる。

「取れたか？」
も、もしかして、ばれちゃった・・・？
冷や汗がたらりと流れたところで、ジンさんが現れた。

「一部屋だけね。この町、今日の夜から明後日の夜までお祭りらし
い」

「お祭りっ？」
突然反応した私に二人は目を丸くしている。

「カナルちゃん、お祭り好きなんだ」
「うん！　大好き！」
クレープに綿飴でしょ、あとアンズ飴にりんご飴。
「少し休んだら見に行こうか？」
「うんっ！　ありがとうジンさんっ」
私はジンさんの嬉しい提案に二つ返事で答えた。
そのときの、アシュさんの表情に気付かないまま。

＊＊＊＊＊＊＊

「アシュさんも行こう？　お祭り」

そう言って、下から俺を覗き込む奏流。

止めて欲しい。煽るのは。

「勝手に行け。俺は疲れた」

冷たく返せば、彼女は泣きそうな顔になり、頭上からは溜息が降ってくる。

取った宿の一室だった。

ベッドはふたつ。

祭りのせいで人が多く、この部屋しか取れなかったらしい。

「じゃあ、私とジンさんだけで行っちゃうからね！　お土産買って来てあげないんだから！」

「行くならさっさと行け。うるさい」

「アシュ」

ジンが俺を睨みつけている。

奏流はとうとう泣き出さなかった。

悲しみが、周りの空気に溶けてここまで届いているというのに。

「行ってきまーす」

最後まで、明るく振舞ってジンと一緒に出て行った。

姿が扉の向こうに消えてから、手を伸ばす。
けれど、やはり届かなかった。
ジンと二人になったら、泣くのだろうか。
本当は、一瞬も傍から離したくないのに、うまくいかないものだ。
今日の昼、太陽がまだ高い時間だった。
奏流は町に向う途中に取った休憩時間に、俺をそっと呼び出した。
俺は、甘い時間を期待していたのに。
あいつは違った。

「もう一度言えよ」

苛苛とした口調で話してしまった。

「だ、だから、もう魔力が必要なとき以外は、触らないで欲しいの」

つまり、俺からお前を奪うと言うことか？
冗談じゃない。

「俺が許すと思うか」

奏流は押し黙ったまま、俺を見ようともしない。
ジンがすぐ傍で聞いているのを、気配で察知したが、放っておいた。
魔力で、威圧してしまえば簡単だ。
なのに・・・小動物のように俺の前で震えている奏流を見れば、そんな気も失せてしまう。

「私、どうしてアシュさんがあんな事するのか、わからないけど・・・・、私は好きな人とじゃなきゃ、今朝みたいなことは出来ないの」

おもちゃにしないで。

ぽつりと、漏れるように落とされた呟き。

「お前を玩具扱いした覚えは無いが」

奏流は俯く。

俺が怒りで放つ魔力に、青ざめて、震えながら。
俺は盛大な溜息をついた。
どうしてこいつは、いつも俺の頭を痛くするような事ばかりする？
その頭痛を和らげるのは、奏流・・・お前だけだと言うのに。
俺はとりあえず了承した。
奏流の怯えた表情を、これ以上見たくないからだ。
けれど、宿で冷たい言葉を放ってしまってから、酷く後悔した。
こんなにも苛苛するのは、まぎれもなく、奏流の禁断症状だ。

＊＊＊＊＊＊

「・・・ちゃん、カナルちゃん」

「あ、は、はい！」

「大丈夫か？　ぼーっとしてたけど」

お祭りの人混みの中、ジンさんは座る場所を見つけて、私を座らせてくれる。

「ごめんなさい・・・」

「アシュの言ったことなら、気にする必要ない」

そう言ってくれることが嬉しかった。
でも、まだ出会って二日だけど、アシュさんのイライラの原因がわかる気がする。
「私が悪いんです」
「カナルちゃんは悪くないよ」
ふっと、いつもは柔らかいジンさんの瞳に、鋭い光がともる。
「いくら血名を呼ばれて、契約をしていたとしても、嫌なことは嫌で良いんだ」
「いいの？」
「勿論」
ジンさんの言葉は、優しい。
――アシュさんを拒絶してしまったこと。
そのことに対する申し訳なさでいっぱいだった心が、少しだけ軽くなった。
「あいつは少し頭を冷やしたほうが良いから」
纏う空気がいつものように柔らかくなったジンさんは、ただね、と言った。
「俺は物心つく前からずっとあいつと一緒に居た。　その間に、君以上にアシュに愛された女の子はいなかったよ」

「愛された・・・・女の子？」

突然時が止まったみたいだった。
周りの風景も自然と色あせていって。
ジンさんがまさかと言う顔をする。

「何も、言われて無いのか？　あいつから・・・」

「何をですか？」

私はもうオウムのように聞き返すことしか出来なくなっていた。
ジンさんはガシガシと髪をかき上げ、非常に困っているように見えた。

「カナルちゃん、今日はもう宿へ戻ろう。　あいつに一言言ってやりたくなった」

怒っているような口調だけど、どこか明るくて。

「はい」

私も、アシュさんとちゃんと話さなきゃ。
これから長い時間を共にするんだから。

愛情？

宿にはすぐに着いた。
ジンさんは部屋に入るなり、「怒るなよ」と一言断って、アシュさんを殴った。
グーで。

（えええええっ！？）

ジンさん、一言言いたいって言ったのに。
殴るなんて聞いてないよ！

「じ、ジンさんっ」

「大丈夫、こいつは殺しても死なない」

確かに殴られたアシュさんは呆然としているが、怪我は無いみたいだ。

＊＊＊＊＊＊

「祭りに行ったんじゃないのか」

ジンが殴ってくるのは久しぶりだ。
荒事に慣れていないのか、奏流は泣きそうな顔をしている。

「お前なぁー・・・物事には順序ってもんがあるんだぞ！？」

「順序だと？」

何のことを言ってるのかさっぱり解らない。
とうとうキレたか？
ジンは珍しいくらい怒っている。

「俺が何をした？　殴るにはそれなりの理由、あってのことだろうな」

ジンの気迫だと、もう一度か二度、殴られそうだ。

「ああ大アリだ。　俺はお前が何もしてないから怒ってんだよ！」

何もしてない、だと？
その時奏流がジンに駆け寄った。
ジンの手を抑えるように触れて、いやいやと首を振っている。

「ジンさん、もういいよ。　これ以上は怪我しちゃう」

「カナルちゃん、君は座ってて」

押し戻すようにジンの手が奏流に触れる。
それを見ただけで体の奥が熱くなった。

「奏流。　他の男に触れさせるなと言っただろう」

お前に触れていいのは俺だけだ。
ジンが深い溜息をつく。

「だから・・・お前にはそんなこと言う権利がまだ無いんだよ」

訳がわからない。

「権利だと？」

ジンが少し悲しそうに俺を見る。

「お前、カナルちゃんに何も言ってないだろう？　だからこの子は不安になるんだ」

不安になる、だと？

「――――奏流」

名を呼ぶと、その小さな肩がびくりと震えた。

「お前、不安なのか？」

答えない奏流の気持ちを代弁するように、ジンが口を開く。

「人間は俺たちと違って、感情を読めない。　お前は特に無愛想で言葉数が足りないんだから、気持ちはちゃんと口にしないとダメだ」

「気持ちだと？」

「好きとか愛してるとか、そんな言葉を一度でも掛けた事があるか？」

まさか・・・・

俺はやっとひとつの考えに辿りついた。

「奏流、まさか俺がお前で遊んでいるとでも思ったか？」

「だ、だって、アシュさんは好きな人以外とでも、できるんでしょう？」

それで、もう触れるなとか言ったのか。
俺は自分にも奏流にも呆れてしまった。
見れば奏流はまだ、ジンの陰で震えていた。
言わなかった自分も自分だが、あれだけ表現していて気付かないほうも悪いだろう。
しかしそれも仕方ないか、と諦める。
奏流は、男に慣れていない。
男女のことにも全く疎くて、そちらのほうに勘が働かないようだ。
俺は長期戦を覚悟した。

＊＊＊＊＊＊＊

「奏流、来い」

優しい声だった。
穏やかな、凪いだ海のような優しさ。
ジンさんに背中を押されて近寄ると、優しく腕に抱かれた。
何故だか、とてもほっとした。

「もう大丈夫か？　カナルちゃんを泣かすなよ」

「お前に言われるまでもない」

パタンと音を立てて閉まったドアの向こうを見つめていると、もっ

と強く抱きしめられた。

「奏流・・・俺は、お前を愛している」

耳元に、キスと一緒に振ってくる甘い囁き。

何でかな、涙が出そう。

「・・・まだ、会ったばっかりだよ」

そう言うと、くすりと甘い笑みを向けられた。

「愛するのに時間は関係ない。　タイミングの問題だ」

「タイミング、良かったの？」

「ああ」

その瞬間向けられたのは、極上の笑みだった。

体中が、真夏の雪だるまみたいに、溶けてしまいそうになる。

「お前が不安になるのなら、何度でも言う。　愛してると」

でも、不安が消えない。

怖くて怖くて、堪らない。

「奏流・・・？」

口をついて出たのは、自分でも予想できなかった言葉。

「ごめん、なさい」

あなたの腕にずっと抱かれていたい。
けれど、そんなことは出来ない。
出来るわけがない。
私は、いつか帰ってしまうんだから。

元の世界に。

＊＊＊＊＊＊＊

何故だ？　何故奏流は俺を拒絶する？
ジンと戻ってきたのは、そういうことじゃなかったのか？
お前も、俺に好意を抱いているという事じゃないのか？

「私、いつか帰るんだよ？　いつか別れちゃうんだよ？」

ならば最初から、誰も愛さないと言うのか？
俺は吐きたくなった溜息をぐっと堪え、奏流を膝の上に乗せた。
より近くで、彼女を感じるために。
奏流は一生懸命に涙を堪えているようで、指先が氷のように冷たくなっていた。

「奏流、お前の世界では、愛するもの同士の別れは決してない事なのか？」

「・・・・・」

奏流の涙は、今にもその瞳から溢れ出そうだ。
「結ばれて、いつまでもそのままでいられる保障なんて、何処へ行

ったって、ある訳がないんだ」

世界なんて関係ないんだ。
お前が人間であろうが、魔族であろうが、関係ないんだ。
どうしてお前を愛してしまったのか、自分でも分からない。
いつから好きだったのかも分からない。
分からない事ばかりで唯一分かるのは・・・・

「俺は、お前でなければ、駄目だ」

この先、お前以上に愛せるものは、きっといないから。

＊＊＊＊＊＊

どうして、涙が出るんだろう。
嬉しいの？　悲しいの？
自分でもわからない。
アシュさんに愛してるって言われて、胸が苦しいのはどうして？
このままこの人を愛してしまうのが怖いのは、どうして？
神様、教えて下さい。

「私・・・・・」

そこで、躊躇って言葉を切ってしまった。
こんなこと言って良いのかどうか、わからなくて。
でもアシュさんは、続けて、と目線で促してくれた。

「私、アシュさんのことは好き。　でもね？　ジンさんへの好きと、どう違うのかまだ分からないの」

好きと愛してるの境界線が分からない。
アシュさんは怒る事も舌打ちする事も無かった。
アシュさんって、こんなに・・・優しかったっけ。
アシュさんは、そっと抱きしめて、髪を撫でてくれた。
心が凪いでいく。

「構わない。　今はまだ、ただの好きでいいんだ」

「いい、の？」

堪えていたものが、溢れてしまった。
この人は、こんなにも温かかった？

「俺はお前を愛している。　それだけは覚えておいてくれ」

「・・・・うん」

あなたを、愛せるようになりたい。
今はまだ・・・愛がどんなものか分からないから。

「今日はもう寝ろ。　明日から忙しくなる」

「うん、」

でも、きっと甘くて優しくて、それだけじゃないものだよね。
あなたがそうしてくれるように。

新しい気持ち

結局、アシュさんは寝ろと言ったのに私に色々した。
口では説明できないようなことも、色々だ。

・・・・キスまでだけど。

アシュさんはどんな時も、私の気持ちを優先してくれて。
優しく見つめてくれて。
そんなあなたに抱いた気持ち。
なんて言ったら、いいのだろう。
私はこの気持ちを口にして、いいのだろうか。

＊＊＊＊＊＊

朝が訪れていた。
部屋の窓の外に広がる大通りには、早くも朝の市が立ったらしい。
隣に視線を移すと、昨晩気持ちを告げた少女はまだ眠っていた。
まだ起こさないほうが良いだろう。
ベッドの上の奏流に布団を掛け直し、そっと部屋を出た。
ドアの横にはジンが立っていた。
きつめの視線を投げつけられる。
昨日の夜、奏流と二人きりになりたくて、追い出したのだ。

「アシュ・・・・・覚えてろよ」

「何のことだ」

一応とぼけてみるが、ジンはこちらを睨みつけたまま。
それを無視し、路銀の入った袋を投げ渡した。

「っと、なんだ？」

「奏流に女物の服を買って来ぃ。お前のほうが詳しいだろう」

「ま、よく脱がせてるからね」

ここにあの少女がいたら卒倒しただろう。
キスひとつで真っ赤になるのだから。
ジンは袋を服の中にしまうと、期待に満ちた眼差しを俺に向けた。

「・・・で、結局何もしなかったのか？」

俺と奏流がまだ恋人にも満たない関係だということを知りながら、この質問だ。
朝から殴り飛ばしてやりたくなる。

「当たり前だ」

「だよなぁー」

相手がカナルちゃんじゃね、とムカつく台詞をはく。
俺のイライラが伝わったのか、奴は早々に降参し、両手を上げた。

「悪い悪い、想像したら面白くて」

「・・・・何がだ」

んー、と到底可愛く見えない仕草で首を傾げる。

「お前が一晩中我慢してるとこ」

――――――殺す。

瞬時に腰の剣を抜き、急所を狙ったが、避けられた。
つい舌打ちが漏れる。

「お前！　止めろよ死ぬだろ！？」

「一度死ね」

もう一度繰り出すがあっさり避け、ジンは傍にあった窓から飛び降り、逃走した。
――――――あとで覚えてろよ。
用済みになった剣をしまい、部屋の中に戻った。
奏流はまだ眠っている。
しかしその寝顔はさっきとは違い、安らかとは言えなかった。
悪い夢でも見ているのか？
それとも・・・・・・。
音を立てずに近寄り、額に浮かんだ大粒の汗を拭い、そっと声を掛ける。

「奏流、起きろ」

「・・・・ん・・・・・、ゃあ・・・・やめ・・・・」

「奏流！」

次第に奏流は息遣いも荒くなって、とうとう叫んだ。

「ぃやぁっ！！」

「奏流！！」

飛び起きた体を受け止める。
そうでもしなければ、ベッドから落ちていただろう。
奏流は暫く手足をばたつかせていたが、落ち着いてきたのか、だんだんと大人しくなっていった。

「・・・・ぁ、シュ、さ・・・・」

「水を飲め」

差し出したグラスの水をほんの少し、飲み込んだ。
俺はグラスをどこかに置き、奏流の顔を見た。
真っ青だった。
俺は奏流の気持ちが落ち着いてから、そっと訊いた。

「どうした。何があった？」

「あ・・・、違う、の。夢・・・・」

悪い夢を見たらしい。
あいつのせいで無いといいが・・・・。

「たまに、見るんだ・・・」

そう言い残し、また俺の腕の中で眠りについてしまった。

（たまに見る、か・・・・）

悪夢には2種類ある。
見た者に影響を与えるものと、そうでないもの。
もし前者だった場合は、其処に何らかの意思介入が予想される。
少し気を付けるべきだな。
奏流をベッドに寝かせ、その柔らかい髪を撫で付けた。

「必ず、守ってやる」

それは奏流と俺自身に対する誓いだった。
奏流が二度目の眠りについた後すぐ、ジンが戻ってきた。

「あれ？　まだ寝てるの？」

厭味な口調ではなくて、心底心配しているようだ。

「うなされていた。暫く寝たほうがいい」

「それは困ったな」

買ってきた服を綺麗にたたんで置くと、ジンは俺に良くない報せを届けた。
もう奏流の噂が広まっているらしい。
とりあえずこの町では。

「人間じゃないかって、勘付いてる奴もいる」

俺は溜息をついた。

さて、どうしたものか。

＊＊＊＊＊＊＊

うなされて目が覚めた後、つい眠ったフリをしてしまった。
起きても構わないけど。
まだ、アシュさんの顔見れなくて。
そうこうしているうちにジンさんが帰ってきて、私のことで二人は話していた。
私、二人の迷惑になってるのかな。
きっとそうだよね。
無条件で見ず知らずの相手を守るなんて、そんなに簡単なことじゃない。
私、どうしたらいいんだろう。
アシュさんへのこの気持ちも、言わないほうが良いのかな。
――――私はいつか帰っちゃうもんね。
アシュさんは別れのない愛なんて無いって言ってたけど、別れが来るって分かっているのに愛し合うなんて、そんなに辛いことは無い。
愛してるから、別れが来ないように願ってしまう。
でもその願いが最初から、叶わないモノだって知ってたら?
私は、耐え切れるのかな。
気付いてしまったこの気持ちに、いっそ蓋をしてしまおうか。
そのほうが、楽なのかもしれない。

私のあなたに対する気持ちは『恋』　でも『愛』　でもないって。
自分に言い聞かせていれば、いつかは本当になりそうで・・・・それも怖いと思った。
いつの間にか、そんなことばかり考えていた。
この気持ちを諦めることばかり。
――――――なのに。

眠ったフリも飽きてきて、そろそろ目を開けようかと思ったとき。

「奏流には、何も言うな。　守ると約束したからな、不安にさせる必要は無い」

「もちろん」

・・・・・そんな、優しい声で言うから。
起きることも、涙を流すことも出来なくなった。
ねぇ、アシュさん。
私本当は、あなたの傍にもう少しだけ居たいの。
だけど、そんな私の考えは甘かった。

これから先に起こることを少しでも予測できたなら

迷わず、アシュさんの許から離れていたのに。

私、今なら分かる気がする。

愛することがどんなことなのか。

こんなにも切なくて、やるせなくて、もどかしくて。

それでもあなたが笑っているだけで、幸せで。
そのあなたの傍にいられることが、何よりの幸運だと感じてしまう。

命すら、惜しくない。
この先、あなたが笑っていてくれるなら。
例え、あなたの隣に私がいなくても・・・・・

食堂

「ん～、おいしいっ！！」

「こぼれてるぞ」

と、言いながらアシュさんは、私の口元に付いたソースを指先で掬い取り、ぺろりと舐め取る。
流し目のおまけつきで。
真っ赤になった顔を逸らし、食事に集中することにした。
私たちは宿の下の食堂にいる。
この世界に来てから初めてまともな料理を食べた。
最初はネズミの丸焼きとか出てきたら、どうしようって思ったけど。
食文化は似かよってしまうらしい。
二人も一緒に食べているのだが、あまり食が進まないようで。
ジンさんに至っては食べることを放棄して、私をくすくす笑って見ていた。

「美味しそうに食べるなぁ」

「それだけ喰うのにどうして細いんだ」

ここだけ切り取って聞くと、私が大食いみたいに聞こえるけど、そんなことは無い。
ただ・・・人より太りづらいってだけ。

「二人はあんまり食べないね」

男の子って、もっと食べるものだと思ってた。
そう言うと、ジンさんが苦笑した。

「俺達が空腹を感じるのは、魔力が足りない時だけだからね」

まあ食べるけど、と人参の様な野菜を口に運んだ。
ふーん、と相槌を打っていたが、ある疑問が湧いてしまった。

「ね、普段は魔力って、どうやって補給するの？」

よくよく考えてみれば、彼らの発言には矛盾がある。
もともと持っている魔力で、寿命とか権力とかが決まってしまうのだと思っていたけど、ジンさんの言い方じゃ、魔力が足りなくなる時があるみたい。
消耗品ってワケじゃないだろうし・・・。
もし消耗するものなら、どうやって手に入れるんだろう。
人間がそこらにゴロゴロしてる訳じゃないし。
私の疑問が分かったのか、ジンさんは困ったように視線をそらし、アシュさんは聞こえなかったかのように振舞った。

「・・・・・どうしたの？」

「えっと・・・」

「奏流、来い」

無表情のアシュさんに呼ばれて隣に座ると、教えてくれた。
魔力は、特別な場合を除いて、永久に一定に、個人の力としてあるものだと。
アシュさんは赤い液体の入ったグラスを私の前に置いた。

そしてグラスになみなみと、新しく液体を足した。

「これがジンの魔力」

液体をさした。

「そして、ジンの魔力の最大・・・限界と言ったほうがいいか。それがこのグラスだ」

其処までは何とか飲み込めた。
アシュさんはちょっとだけ液体を飲んだ。
グラスには８割ほど、液体が残っている。

「俺達が生きる為には魔力が必要だ。食べなくても寝なくても死にはしないが、この液体が無くなると、ジンは死ぬ」

その例えヤダなぁ、と情けない呟きをアシュさんは無視した。
ごめんね、ジンさん。

「だから俺達はこの液体が尽きてしまう前に、新しく足す。それが補給だ」

と、グラスに飲んだ分を足した。
それで？　と言う私の視線を、アシュさんは、今度こそ受け止めた。
肝心の、補給の方法をまだ教えてもらっていない。
アシュさんは、そっと私に耳打ちした。

「・・・・・・するんだ」

「っっっっ！！」

顔が、顔が熱くなりすぎて、溶けてしまう。
私から離れてその様子をニヤニヤ顔で眺めるアシュさんは、やっぱり、悪魔だ。

「理解できたか？」

「・・・・・・はい」

ま、ま、魔力って、そうやって得るものなんだ。
本当は。
元の席によろよろと戻ると、ジンさんが慰めるように、頭を撫でてくれた。

「だから、お前から普通のやり方で魔力を得たら、とんでもないことになるだろうな」

くくっと、心底楽しそうに笑う悪魔。
・・・・・・私、何でこんな人が好きなんだろう。
・・・・・M体質なのかなぁ・・・・・
アシュさんは向かいの席に座っているというのに、私に手を伸ばした。
髪をひと房掬い上げて、いつかのように捧げるようなキスをする。

「あ、アシュさん！？」

周り、周りが注目してるよっ！
特に女の人からの視線は、この上なく痛い・・・気がする。
「だからと言って、お前が欲しい訳じゃない。　ちゃんと愛してる

からな」

チュッと軽い音を立てて、髪が元の位置に戻る。
この人は、もしかして私を殺したいんだろうか。
そう、思ってしまうくらいに。
恥ずかしくて、今にも心臓が止まっちゃいそうだ。

「どうした？　顔が赤いぞ？」

確信的に笑みを向けてくる悪魔。
もう、アシュさんがこんな風にしたんじゃないっ！
心の中に、もやもやとしたものが溜まっていく。
余裕の笑みを向ける悪魔への苛立ちなのか、それとも・・・・――

「アシュさんのバカっ」

がたんと椅子から立ち上がり、込んできた食堂から逃げ出す。

「カナルちゃん！？」

出来るだけ人混みを選んで走り抜けた。
そうすれば私より体格の良い二人は追いつけないから。
なんで、逃げてしまったんだろう。
危険なことは分かっていたのに。

＊＊＊＊＊＊＊

「ジン、追いかけろ」

あの馬鹿、と舌打ちする。

「言われなくても追いかけるよ」
ジンが去ってから、俺は視線を感じて食堂を見渡した。
誰かが、出て行くぁの二人の背中を見ていた。
すでにその気配は消えて、追うことも出来ない。
俺は溜息を吐き、勘定を済ませると、一旦上の部屋に戻ることにした。

＊＊＊＊＊＊＊

宿を飛び出し、走り続け、いつしか人通りの少ない路地へと迷い込んでしまった。
前日の疲れもあってか、軽い眩暈を感じ、その場にしゃがみこむ。
私、なんてバカなことしたんだろう。
二人から、離れるなんて。
あんな話を聞いて、恥ずかしかったから？
ううん。違う。
心のどこかで、思ってしまった。
アシュさんは・・・他の女の人と、シたのかな。
わかってる。
アシュさんは私よりずっと大人だし、それが魔力を得る方法なんだから、シたことだって、きっとあるはず。
ただ、私がとても子供なんだって、思い知らされたみたいで、嫌だった。
私にはアシュさんを愛する権利なんて無いのに、他に、あのキスをする人がいるのかなって思っただけで、胸が苦しくて。
それなのに、惜しげもなく『愛してる』って言われることが・・・
涙が出るくらい、痛い。

嫉妬？
羞恥？
・・・羨望？
町に入ってからの、女の人たちのアシュさんへの視線も、私の心にドロドロしたものを生ませた。
あの人達みたいに、私は綺麗でも、大人っぽいわけでもない。
アシュさんに負けないくらい、深い溜息が出て行く。
苦しい。
空気って、こんなにも吸い辛いものだった？
アシュさんは、私を探してくれてるかな。
それとも、食堂にいた女の人たちと、誘われて遊びに行ったりするの？

こんな気持ちになってしまう理由は分かっていた。

私は、好き。
アシュさんが。

分かってたけど、そのことを考えると、浮かんでくるのは涙ばっかり。
人生初めての恋の相手が、あの人なんて。
私は恋愛の神様から、見離されてるのかもしれない。
同じ未来を歩ける確率なんて、ゼロに等しくて。
思えば思うほど、別れが辛いのは目に見えてる。
帰らないと言う選択肢は、どうしても選べない。

家族がいる。
友達がいる。
何より・・・１６年過ごした世界を、簡単に忘れるなんてできっこない。

・・・・・けど、あの人の傍にいたい。

どうしても、どうしても。
私はいつからこんなに、ワガママになっちゃったんだろう。
私は立ち上がった。
戻ろう、アシュさんのところへ。
飛び出してきたことを二人に謝って、それから・・・・。
胸の前に作った拳を置く。

私は、帰るんだ。
必ず、元の世界に。

だから・・・この気持ちは、絶対に気付かれないようにするの。
そして、忘れてしまおう。

帰る頃には、この気持ちも、この苦しさも。
私は宿のほうに向って、走り出した。

騒動

本当に、どうして、宿を飛び出してきちゃったんだろう。
そんなことを思わざるを得ない状況に、私は置かれていた。
路地を走っているうちに、数人の男の集団に捕まってしまった。

「か～わいい、君一人？」
「お祭りなのに彼氏と喧嘩でもしちゃった？」
「あっちに美味しいお店があるんだ、一緒に行こうよ」

「は、離して」

そうやって強引に右腕を掴んできた手を、思いっきり振り切る。
けれど、実際は男の人の力に敵うはずなんてない。
わざと離したんだ。
案の定、私の腕を掴んでいた奴はわざと痛がった。

「いってー・・・うわ、腫れてきちゃった。・・・・君が乱暴にするから」

「っ」

乱暴にしてきたのは、そっちが先なのに！
ナンパされた経験はあんまり無いけど、これはまずいって本能が告げていた。
に、逃げなくちゃ・・・
それでも、震える体はうまく動いてくれなかった。

「奢れなんて言わないよ、怪我のお詫びにちょっと付き合ってくれれば」

そう言って無理やり肩を抱いてきたのは、怪我をしたと喚いて、いちゃもん付けた男。
肩に回してる腕、痛いって言ってなかった？
男は顔を近づかせてきた。

「おっ、震えてる震えてる。ねぇ君種族は・・・・」

言いかけた言葉を男が飲み込む。
そいつの額には鬼の角があった。
種族・・・？
恐怖にずっと俯かせていた顔を、顎を？まれて、無理やり上に向けさせられる。

「・・・お前、何で匂いがしない・・・？」

男の言葉に、その場に静けさが満ちる。
――匂い。
ジンさんにばれたときも、それが原因で・・・。

「――こいつ、人間だ！！」

周囲に、一瞬で爆発したような騒ぎが起こった。
これから起こる、最悪の事態に、きつく目を瞑る。
ごめんなさい、アシュさん・・・！！
ジンさんの時は「臭う」と言われてバレた。
今度は、「臭い」がしないと言われ、バレた。
その二つの事への違和感を感じる暇も無く、背後の壁に押し付けら

れる。
それがいささか乱暴だったせいで、痛みに顔が歪んだ。
けれど、そんなことは奴らにとっては、関係の無いことだった。

「マジで人間か？」

「もっと鼻の利く奴連れて来いよ」

押さえられてる肩に、鋭い爪が食い込む。
ぎゅっと奥歯を噛み締めて、痛みと恐怖を耐え抜こうとした。
泣いちゃ、ダメ。
泣いたら涙が変わってしまう。

「どうする？　こいつ」

愉しげな声。
荒く熱い息。
私に向けられる全てが、鬱陶しい。

「喰うか？」

ぐいっと顎を持ち上げられる。
指が違う。
あの人は、そんな触れ方をしない。
これから何をされるのか考えたくもなくて、頭が全てを拒絶した。
ぼうっとする意識の中で、暗がりに引きずり込まれている自分がいても、何も出来ない。
何かが引き裂かれるような音がして、絶望する。

アシュさん。

アシュさん。
アシュさん。

叫んでも、助けてくれる人はいない。
叫んで、私が人間だともっと多くの人にバレれば、今より状況は悪化する。
この世界で私は、本当に一人なんだ。
首筋を這うザラザラとした感触に、ぎゅっと目を瞑った。
泣いちゃダメ。
・・・アシュさん・・・・！

次にされる行為から目を背けたくて、必死に自分を殺していた。
けれど、いつまで経っても、それ以上のことはなくて。
そっと、瞼を上げる。
目の前の光景に呆然としていると、すらりとした手が伸びてきた。
うそ。
これは、夢？
でも、求めていた指だった。

「アシュ、さん？」

「馬鹿が」

強く、何処からが自分なのか分からないくらい、しっかりと抱きしめられた。

「どうして・・・・」

「ふざけるな。俺をなめているのか？」

と、金色の瞳を近づけられる。

「・・・お守り・・・？」

出会ってすぐに渡された、ネックレス。
アシュさんの瞳と、同じ色の。
本当に、守ってくれたんだ。

「アシュさん・・・っ！」

もう抑えきれなくて、涙が溢れてしまった。
アシュさんは途切れない私のそれを、全て綺麗に舐め盗っていく。

「人前で泣くな。　俺以外の奴に見せるな」

怒った声に、更に涙が止まらなくなる。

「だ、だってぇ・・・っ、あ、しゅさ、んが・・・・っ」

アシュさんは私の嗚咽に代わった泣き声を見て、呆れたように溜息を吐くと、私を黒いマントで包んだ。
頭から、すっぽりと。
髪一筋も、彼以外には見えないだろう。
私から見える景色も、アシュさんだけだった。

「ジン」

暫く、そんな風に感じた時間の後、アシュさんが言葉を発する。

「こいつらを始末しておけ」

（アシュさん・・・・？）

怖い、と一瞬思ってしまった。
それくらい、冷たい声。
ジンさんがいるのも気配で感じることが出来たけど、視界が限定されているので、実際はどうか分からない。
でも、体が芯から冷えてしまうような空気が、その場に満ちていたことは確か。
必死に謝りたい衝動に駆られた。
私のせいなんだ。

「・・・・ごめん、なさい・・・・」

絞り出した声は、自分にしか聞こえないくらい小さい。
けれど、二人には・・・少なくともアシュさんには届いたようで。

「馬鹿が。　何も考えるな」

その声が合図だったかのように、私の意識は暗闇に落ちていった。

＊＊＊＊＊＊

奏流が食堂を飛び出した理由は、何となく分かっていた。
可愛い嫉妬が嬉しい。
それは、奏流が俺のことを少しでも意識していると言う証拠だった。
けれど、今はそんな甘いことは言ってられない状況だ。
祭りで馬鹿な行動を取る奴らもいる。
俺はジンに追跡を任せた後、部屋で奏流の気配を探っていた。
最初に渡した金色のネックレス。

俺の瞳は普段青いが、魔力を発動させる時だけ、金色に変化する。
それは魔族の中でも珍しいことで、そのせいで俺に付いた二つ名が・・・

『金の王子』

その名は、好きではなかった。
二つ名を気に入ってる奴も珍しいことだが。
自分の王子という境遇も気に入らなかったし、他とは違うのだと・・・境界線を引かれているようで、嫌だった。
いつしか金の瞳も、いや金色自体が、好きではなくなっていた。
なのに俺は何故か、あいつに金色の石を贈った。
俺の魔力と匂いを封じ込めた魔石。
奏流があれを身につけている限り、どこに居ようと俺にはすぐ分かる。
青にしても問題はなかった。
なのに、金。
何故なのか、今でも全く分からない。
ただあいつが、それを毎日身に付けていたから、いつの間にか金色が鬱陶しいと感じることも少なくなった。
奏流を思いながら、気配を探る。
見つけ、掴んだものを、後は追うだけだったのに、あいつが、姿を見せた。

俺の前に。

漆黒の髪。

紫紺の瞳。

弓形に歪んだ、薄い唇。

何よりも憎んで止まない、男。
俺の伯父であり、憎悪の対象であり、敵である男。
奏流を人間界から呼び寄せた男。
そして・・・

「久しぶりだね？　アシュ。　奏流はどうしてる？」

奏流を、わざと俺の許に落とした男。

「・・・何の用だ、セルト」

現、魔王。
こいつも俺と同じく、瞳の色が変わるはずだ。
普段は緑。
窓辺に立つそいつに、舌打ちする。
折角掴んだ奏流の気配を、折られてしまった。

「怒ってる？　あの子じゃ不満？」

言いようのない憤りに、目の前の男の首を絞めたくなる。
こいつの考えていることが、分からない。
何を企んでいる？
奏流をどうする気なんだ？
余程強く睨んでいたのだろう、セルトが俺に向かって笑みを向けた。
俺でなければぞっとするような、微笑み。
その目が笑うことなどない。

「気にしないで、今はあの子との時間を楽しみなよ」

いつまでか保障できないからさ。
そんな物騒なことを口にする、正真正銘の悪魔。
俺は悪魔を見据えながら釘を差した。

「奏流にこれ以上手出しするな。　・・・・・近づけば俺が先にお前を殺す」

勿論そんなことをすれば、王族であろうと死刑になる確率は高い。
けれど奏流の為ならば、構わないと思う。
その時は、奏流を攫って逃げ続けてやるつもりだ。
どこまでも。
悪魔の微笑みは、何を言っても崩れる様子がなかった。

「・・・・いいよ、考えておく」

セルトはそう言ったきり、何かを仕掛けてくる様子がない。
だから俺は、背を向けて部屋から出て行った。
今は、あいつの為にしか走れないから。
セルトに構っている暇はなかった。

だから、あいつが最後に言った言葉を、聞き逃してしまった。

「でもね、あの子は、　僕のものなんだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7698p/

つきの国

2011年4月1日17時43分発行